家庭雜誌

第貳拾參號

⊙⊙牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ

⊙此スコツト乳菓中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滯リナク容易ニ服用シ得ル樣ニ調化シアルモノナリ

⊙筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコツト乳菓肺病、瘰癧、精神疲勞、小兒ノ衰弱症及慢性ノ咳嗽ヲ治スルニ最好最良ノ調劑トシテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞賛措カザル處ナリ

⊙龍動スコツト及バウン謹製

日本一手特約販賣所

横濱廿八番
神戸十七番

米國貿易商會

⊙賣捌所ハ全國至ル處ニアリ



純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配劑ナル

スコツト乳菓

德富猪一郎著

再版

吉田松陰

定價金五拾錢

郵稅金六錢

松陰の肖像○松陰神社、松陰墳墓の圖(米僊氏畫)○佐久間象山松陰を送る詩。松陰東北日記。松陰より横井小楠に與ふる書簡。及び長州の先輩村田清風の詩。孰れも其眞蹟を石版摺にして附載す

吉田松陰發賣以來未だ一ヶ月に滿たず第一版三千部已に賣り盡して**再版**既成正に發賣す、跂望の諸君幸に御購讀あれ。

本書が如何に勢力を有し、如何に價値を具へ、又如何に今社會を傾動しつゝあるかは、左の最も精確なる批評に由りて判知するを得べし。吾社豈徒らに自ら賛せんや。

◎題して『吉田松陰』と云ふと雖も、實は維新革命の一部分を寫したる活歷史なり文章の簡淨にして而も斬新の言顯(エキスプレッション)に富む、其の人物を描くの巧妙なる韓退之マコレーを九原より喚起して松陰傳を作らしむるも是迄ならん、蓋し氏の名をして日本の大家(クラシック)として世に不朽ならしむるは此の『吉田松陰』ならん、細目の評は他日精讀の後に讓る、(經濟雜誌)

◎世間若し吾人に向かひて讀みて面白きと同時に識見卓拔なる書を近著中に就いて示せといはゞ吾人はまづ此の書を推撰すべし、蘇峰氏は此の普く世間を悅ばする筆を有する點に於て實にマコーレー卿に似たる所あり、よしや其の文章家としての資格はマコーレー卿に倘數歩を讓る所あるも其の識見に於ては彼の卿の下にあらず、此の書題して『吉田松陰』といふと雖も著者みづからいへる如く優に『維新革命前史論』と名け得べし一卷三百餘頁の冊子宛然として我が近世史に於ける最も驚歎すべき最も感奮すべき、最も慨慷すべき又、最も翫味すべき種々の出來事を、殆ど演劇的に活畫し來たり讀者をして卷を措くを難んぜしむ、忽にして維新前に於ける全日本の政局、忽にして松下村塾の光景、忽にして佐久間象山、忽にして水野越前、譬へば健腕の畫匠が椽大の筆を揮つて咄嗟に山川艸木花鳥人獸を描畫し來たるが如し而して著者が得意の評論は巧に其間の理脈を繫ぎて吾人をして個人と時勢との關係、國家と其の周圍との關係、其の他幾多の聯絡を會得せし

む、今や世間翕然として回顧す、然れども彼等の多數は尙僅に過去の個人を考察するに汲々たり著者は更に一步を進め個人を考察すると同時に時勢を考察す、着眼の國家大なる所此の著者たる所以なり(早稻田文學)

◎……此書、蘇峯の手に成る。其文章の明淨流麗、其の批評の簡截峭拔、其眼孔の鋭利靈活、其時勢を寫すの明透深刻なる、其の人物を畫くの高妙輕捷なる、實に近時の一大佳篇と爲す。東湖を指して『國家經綸の大綱を提げ、社會動亂の趨勢を握るの辣快雄敏なる、自ら獨步の地あり』と言ふが如き、象山を指して『人は自ら立たんとなす所に立つを得ば、彼は實に百尺樓上に立つものなり』と言ふが如き小楠を指して『橫井一生の工夫、總合大觀に在り』と言ふが如き、所謂『風雲在口、鬼域生心』の妙あり松陰を寫すや『革命の健兒』と呼び、『天成の鼓吹者』と呼び、『殉國殉道の達人』と呼び、『眞誠の人』と呼び、『一箇の革命的急先鋒』と呼ぶが如き、所謂字字精金、句句美玉、東坡、聖歎をして再生せしむるも、斷じて一字を易ふると能はず……(中央新聞、千山萬水樓主人)

◎德富蘇峰、嘗て自著「人物管見」に序して曰く、如何にして人間を知る、直覺の心意、精到深射の眼識、寬裕同感の胸懷、及び謹嚴周匝なる事實の捃拾、闊大包括なる四圍の觀察の如きは、最も必要なる資格に相違なき也と。今や、此等の資格を理想として、而も用意非凡、精勵亦非凡なる彼は、文學者としての彼に尤も適當せる人物評傳の一大著作を、初めて吉田松陰の上に試みたり。書を開き亦閉ぢて、先づ三つの注意すべき事實を看取す。曰く、新島先生の紀念として斯の册子を獻ぐ。余亦た海舟翁の門下に教を受く。彼が殉難者としての血を濺きしより三十餘年、維新の大業半は荒廢し、更に第二の維新を要するの時節は迫りぬ、第二の吉田松陰を要する時節は來りぬ、彼の孤墳は今既に動きつゝあるを見ずや。此の三片辭、鼎立して彼が立場を支ふ。以て、著者が、精神を察知すべし。卷中の副主人公、十を以て算す。一々精辣の評皆な各箇の小傳論たり。讀過して殆んど應接に遑まあらざらしむ。就中、小楠と象山。越州と樂翁との双關評の如きは、品定百回に動かず、古人をして千歲の下に安んぜしむ。嗚呼、何等の觀識ぞや。……一卷一人物の評傳として、近代、世に出でたる創作に、未だ此書の如く、評眼透明、品藻徹底せしものを見ず。吾人は、敬重して之を迎へ、暫らく其小瑕瑾を言はじ。(評論)

◎人物の評論に於て最も長せりと稱せらるゝ德富氏の人物評論中未だ此書の如きものを見ざるなり。此書は彼れ自から吹聽する如く題して「吉田松陰」と云ふと雖も其の實は維新革命史論なり先づ德川幕府は何故に且つ如何にして顚覆したる乎を説き、外交の問題突如として起り幕府傾覆の機運頗る熟し開國鎖港の論沸騰して感情痛く紛擾せる時に於ける種々の政略種々の人物種々の事業大概其中に網羅列擧せざるなく夫より時勢、境遇、血統が遂に吉田松陰を作りたるを説き進んで家庭に於ける松陰、天下の士としての松陰、革命家としての松陰教育家としての松陰等を描く頗る精細巧妙一たび之を披けば容易に卷を放つに忍びす吾人は德富氏の人物評論中實に第一の傑作として之を世人に紹介するを辭せざるなり(報知新聞)

◎維新革命の際に最も偉大の名ある吉田松陰先生は德富蘇峯氏の筆に依りて世に公にせられたり蘇峯氏の人物を畫くに巧みなる既に世論の認むる處庸夫蒭童も氏の筆にかゝる時は其行爲又見るに足るべく人をして覺はず快哉と呼ばしむるに至る是れ氏が炯眼卓見妙に人の言ひあたはざる處を言ひ人の記す能はざる處をば記すにあり松陰は實に一代の豪傑なりこれが實歷を敘する者又氏の如き文壇の雄將たらざるべからず然れ共氏は此書に於ては松陰の實歷を記すとに務むるよりは重に維新革命史の事に筆を向けたり故を以て此書吉田松陰の全傳を敘するよりは最も剴切に痛快に維新革命史の事を敘せり方今我文學者實に歷史家其人に乏しく從て又其書少なし此寂寞たる文學界斯る書冊の發行を見る吾黨の喜んで之れを讀者に紹介する所以彼の櫻痴居士の筆になる幕府衰亡論を一讀したる者は亦必ず此書をも一讀せざるべからず(大坂每日新聞)

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

明治二十七年二月十日發行
家庭雜誌第貳拾參號

目錄



家庭雜誌第貳拾參號

(明治二十七年二月十日發兌)

社説

新婚者への戒

結婚は何の爲めになす乎、唯た面白く、可笑しく、遊ひ與して日を送らんが爲め乎。否〳〵決して然らざるべし。

古の人も男女室に居るは、人の大倫なりと云へり。蓋し結婚は、人生の完全なる發達を遂げ、人間の圓滿なる目的を達せん爲めの道にして、莊嚴神聖なる人事の一なれば、寧ろ快樂と云はんよりも、職分と云ふ可きものぞかし。

然るに心得難きは、結婚それ自身を以て、最大快樂となし、最後の目的となし、結婚迄は、勉勵もなし、辛抱もなし、克己もなし、進歩もなしたるものが、一たび結婚すれば、何事も手に附かず、總てのものを放擲し去るは何ぞ。左なくとも凌雲の志は鈍れ、氣は沈み、一朝にして精神的半死人となるが如きは何ぞ。

それ結婚は人生最後の目的にあらず、その目的を達する道にあらずや。其の勉勵をなし、辛抱をなし、克己をなし、進歩をなすは、結婚前よりも、結婚後こそ最も緊要なるにあらずや。然るに斯く心得違ひをなすは、甚だ以て心外千萬ならずや。

世には家業に魂を入れたる甲斐〳〵しき若者にして、結婚したる後は、ブラ〳〵として遊ぶものあり。世には學問に秀てたる學者にして、結婚したる後は、志業を荒廢するものあり。世には文藻に長けたる才子にして、結婚したる後は、頓に其の華やかなる文才を失ふものあり。世には天下の有志家を以て、任したる者にして、

結婚したる後は、乍ち細君の御守役となり、遊ひ相手となり、一寸とも門外より足を蹈み出し能はざるものあり。吾人は世人皆な然りと云ふにあらず、然れども多くの世の中には、まゝ斯る例あるを見る、否な隨分少なからざる例を見る。

男子のみ然るにあらず、婦人も亦た然る也、寧ろ最も多く然る也。如何に女學校に於ける閨秀の、人の妻となりて、平々凡々となり行くを見ずや。兼て孔雀と思ひたるものも、何時の間にやら、烏となり濟すにあらずや。識者が結婚を以て、青春妙齢の男女の進歩を沮折せしむる大敵となすは、餘り矯激の言葉の様なれども、亦た大に時弊に適中したるものなくんばあらず。

結婚とは果して斯る恐ろしきもの乎、否々決して然らず、唯だ結婚者其人の不心得よりして然る也。昔は英國の畫家フラックスマン結婚したりければ、其の師友たる畫工の棟梁レイノルド卒爾として語て曰く『聞く御身は結婚したるとな、御身の志業も最早此れ迄なり』と、斯くも聞きたれば、フラックスマンは大に慷慨し、『よし、さらば我等が志業の荒むか、荒まぬかを試さん』とて、夫妻相携へて、羅馬に赴き、遂に屹然たる大家となれりとぞ。結婚して此の如くんば、結婚は實に人生の志業を達する所以にあらずや。

吾人が最も愛讀するは、鹽原多助の結婚談なり。いざ祝言と申す場合に、佐倉より炭船着きたりとの報知に接し、花婿の多助は、上下の端を折り、向ふ鉢卷にて、炭俵を船上げすれば、花嫁も亦た振袖を結びて、その手助けをなしぬ。斯くて多助が花嫁の振袖を見て、儂家には斯る贅澤なる衣物は無用なりと云へば、花嫁は言下に、鉈もてその振袖を打ち切り、半袖となして働きしとかや。

昔噺しとして見れば、たゞそれ迄の事なれども、大な

る訓戒は寓して、此の中にあるを知らずや。彼の蜜乳月杯とて、遊び興して、夢の様に世を送る新婚者は勿論の事。結婚して氣の抜けたる樣な若夫婦。若しくは身分不相應に、强ひて花々敷結婚をなし、それよりして乍ち借金の深淵に沈み、生涯頭の擧らざるが如きものは、宜しく此の鹽原多助を以て、その手本となす可き也。

科學

冬の生命（下）

我等は既に苔に就きて多くのことを研究し、畧ぼ其の生育の狀態を解說せり、されど以上述べたるもの尚ほ複雜なる彼等の生涯の二分一に過ぎず。

前にも屢々述べたる如く、苔は寒く恐ろしき冬の日に於て、天地の生命を一身に集め、時々刻々著しき生長をなし繁殖をなす。彼等が充分の生長を成し遂ぐる頃には、冬は雁と共に其の住家を求めんとて遠く去り、積雪と共に消へ、春は燕と共に其の舊巢に歸り來り、花と共に遍ねく地の上を舞ひ行く。而して我が勤勉なる苔も亦た此の世界的饗莚の爲めに身を粧ふことを忘れず、其の細き莖の或るものゝ上端に微かなる苔花を華かしむ。此等の花は（第九圖を見よ）花とは云へ、單に節を有する毛の如きものを以て楕圓狀の袋幾個を包み、（第十圖）其の上を更に通常の苔葉よりは少しく短かく硬き葉を以て包み成したるものに過ぎず。此の袋

第九圖



一楕圓狀の花（其の詳細なるは第十圖）
二德利狀の花（其の詳細なるは第十一圖）
三花より出でたる莖（其の詳細なるは第十二圖）
四笠を被りたるもの（同）
五笠を脫したるもの（同）



第十圖



第十一圖

には第十圖によりて示したる如く其の形楕圓なるものと、(第十一圖)によりて示す如く德利の如きものとの二種類あり。時としては同一個の花にして此の二種の袋を有するものあれども、同種相集り異種相離れ、楕圓狀のもののみ集りて、圓き花を作り、德利狀のものゝみ集まりて長き花を作るを普通とす。花の熟するや、楕圓狀の袋より成れる花の其の袋、上端に於て口を開き幾萬幾億の細胞を吐き出す、此等の細胞はまた破開し、植物學者が『アンセロゾイト』と名を命じたる、ふわり〳〵と動く微さきもの、一細胞より一づゝ飛び出し、群集せる苔の間をくゞり德利狀の袋より成れる花に達し、其の德利の口より飛び入り、始めより德利の中にある他の細胞と合し、苔の卵と成る。即ち高等植物の實に於ける核の如きもの。

彼等は實に苔の實には相違なきも、他の高等植物に於けるが如く成熟の後直ちに地に落ちて芽を萌すことをなさず、德利狀の袋の中に長く留まりて生長し、苔の莖の中に小さき管を下し、他の植物が地に根を下して其の營養物を吸取る如く、此の小さき管によりて莖より直ちに營養物を吸取りて發育し、次で自個の莖を別に作り、生長するに隨つて袋を押し上げ、益々強く押して遂に袋を半腹より引きちぎり、引きちぎりたる上半を笠の如く上に冠りたるまゝにて袋の上に延出づ、(第九圖)。かゝる間に笠を戴ける莖の頂上は膨脹して瘤となり、小さく可愛らしき罌粟坊主の如きものとなる。彼等は普通に苔の實と稱せらるれども、實は一個の立派なる植物にして前に云へる小さき管によりて其

の食物を吸收するなり。彼等の多くは其の生長を遂げんが爲めに數ヶ月間の長日月を要す。さても屋上屋を架するを笑ふ人に引き替へて、莖上莖を生ずる苔のまづ心なさよ。

小さき罌粟坊主は蛾の目を以て見たらば金剛石も及ばぬ寶玉とも見ゆべし、細き毛の如き莖の、或は綠、或は黃、或は赤く輝ける帽子を戴ける美はしさに類ふべきものはあらず、而して其の全體の大さは、莖も笠も總てを合して針の頭に過ぎざるなり。視力健やかなる諸君は春か或は夏か、時としては冬の日にても、容易に彼等を見出すことを得べし。時來つて彼等は其の美はしき笠を脫して愛らしき顏を擡ぐ。試みに甚だ小さく甚だ美はしく甚だ復雜なる彼等の構造を窺はんか。先づ來るは外皮なり、此には濕氣を吸ひ吐く爲めに開閉自在なる無數の穴あり。外皮の下には二層の細胞あり、其の次には空氣を盛りたる空隙あり、其の中に綠色の細粒ありて濕氣の入り來るに遇ふて小さき植物に食物を供給するの用をなす。最後に此の中にまた一塊の纖維あり、其の周圍に生ずる細微なる粒こそ、採つて播くべき苔の種なれ。

第十二圖



笠の落ちたる後は第十二圖に示すが如く車の齒を最も密に疊みたる如きものあり、空氣の濕り勝なる間は堅く封じて開かず、晴朗なる天氣來るを待つて始めて開き種をして地に溢れ落ちしむ。

種の地に落ち去ると共に小さき罌粟坊主の如き植物は其の功を遂げたるものから、速やかにしぼみ枯れ落つ。其の中よりこぼれ落ちたる十、十五、乃至二十以上の種子は地に留まると暫時にして芽を生じ新らしき苔の群となつて生長す。

今や我等は全く苔の生涯を敍し終り、前に敍し始めた

る點に歸り來れり。微き粒の種より、絲筋の塊なる『プロトテマ』となり、同一の根より多くの莖を生じ、綠色の段通となり、綠の葉既に長じて綠の花を出し、花の上にまた莖を生じ、かくて微き粒の種を結び、其の種また同一の順序を繰り返さんとて地に落つるに至るまで、我等は甚だ復雜なる生涯の概略を了知せり。此に至つて我等をして復雜なる彼等の生涯より一事を繰り返さしめよ、かび草にあつては、我等は其の一部なる綠色細胞は全躰の爲めに食物を供給して營養機關となり、他の一部なる黴は營發機關を繞り、彼等をして常に日光、濕氣を吸取するに最も都合よき地位に立ち、且つ適度の熱氣寒氣に遇ふことなからしむる防護機關となるを見て、其の驚くべき發達の秘訣は兩者の相賴り相輔くるにあるを知りたること、及び苔に於て我等が見たる驚くべき發達の秘訣は彼等が最下等植物と高等植物との中間に立ち兩者の長を併せ、小さきながらも根を有し上に向つて生長し得ると共に、其の總ての部分各々自ら働らき自ら食ふにあるを知りたることを繰り返さしめよ。

前にも云へる如く廣き地球の上、彼等の生長し居らざる地は殆んどなき程なれば、其の種類甚だ夥多にして數ふるに堪えず、隨つて其の莖、其の葉、其の實の形狀組織千差萬別記するに勝えずとは云へども、此の畧傳中の畧傳は諸君の爲めに貴き紹介狀となり、美はしきもの面白きもの、乏しき冬の日に於て、沼の傍、森の中、岩の上、或は灰色或は唐紅、或は綠色なる鮮衣美服を着け、時に或は赤、或は綠、或は黄にして輝やける帽子を戴ける仙女と相遇ふて直ちに手を握り朋友となるを得せしむべし。彼等の種類かく多きか中に最も面白きは森の中の濕地を厚く被ふ水苔にやあらん。其の灰綠色の葉と柑色の果と映り合ふ美はしさは、一たび見たるものゝ目より離るゝことなかるべし。

其の葉の構造に至つては更に學んで面白きもの多けれど、今は只だ其の一群を左に圖し置くのみにて止めん。

第十三圖



（前號の挿圖苔の葉の位置は上下顛倒したるものなり、爰に正誤す）

雪の話

降雪のためには、小供は雪の上を轉ろびて衣物を穢がし、八百屋魚屋は足を絶ちて、食卓の上空しくなり、猫が泥足にて床に上りために度々の掃除を要するがため、妻君たるもの丶最も恐るゝ所なるが路傍の掃除をなす小僧、下駄のはなをを直す下女、學校に出勤する教師等、雪を敵として惡むものは少からず。

然れども何百の詩人文客か、一時千金の樂しみを爲しつゝあるかを知らざるなり、賢こき農夫が今年の收入を計算して喜びつゝあるかを知らざるなり、田舍の獵犬が轉び〳〵て戯むれ居るかを知らざるなり、雪なげをして喜ぶ小供は又た一しほ喜あり。

又たその利益の上より云へば、雪は潜熱とて、一寸人の手にて感じ得べからざる一種の熱あるが故に、地上に降りて積るときは、能く植物の根を保ち、特にエスキモーの如き寒國の人は、雪の家を作りてその中に温を保てり、農家にて雪は豐年の徴なりとて喜ぶは故ある事なり。雪のために害虫は殺ろされ、雪のために雜草は枯るゝなり。

かく利益ありて面白き雪は、如何にして降るかと云ふに、地上が漸々と寒くなりて、寒暖計の三十二度に下るや、今迄ふか〳〵と立ち上りし霧は、自然の魔力に感應して、見る間に花ともなり、蝶ともなり、或は鈍

々として星の光るが如きもの、或は針刺の一面に針を刺したる如きもの、或は蕨の葉の如きもの、種々樣々の形となりて土の上にも、木の上にも、屋根の上にも、人の頭にも何れ嫌らはず降り敷きて、一時に綿の帽子を着く、之れを雪と云ふ、かく樣々の形を爲すも、一つの不思議は、雪の片々は、各々三角か六角に切り刻ざまれて落ち來る事なり。我等の目に、雪の白く見ゆるは、彼の物理の試驗を爲す時、三角の硝子が、七色の光線を顯す如く、三角の雪の片れが、各々七色を顯せるに、澤山の三角柱より發する七色が、合するが故に白くなるなり。

自然は如何に奇態なる手を持てるよ、大は空中に光れる諸ろの星を一まとめにして入るゝ宇宙より、小は殆ど考ふべからざる雪の花、水の中にありと云ふ小さき虫、はては空氣の一分子の如き、見へざる物迄を、規則に合して造り、少しも過る處なし、雪の大さは、一定はせざれども、その一片は大凡一寸の百分の七、即ち七厘の直徑あり、その輕ろさに至りては、同じ分量の水と比して、十倍より十二倍の輕きを知る、今乾一ぱいの雪を取りて、水となさんに、溶くれば僅か一寸位の深さとなり果つるなり。

暖かき國にては、雪降らば雪見とて大騷ぎを爲し、化粧水よ花生の水よと珍重すれども、寒き國高き山にては、四時雪の溶けざる處あり。夏に至りて雪の溶くるとゝけざるの境を雪の境と云ふ。之れは國によりて異なり、山の北手と南手は異なり、空氣乾燥の度、山の方向、風の關係等、凡ての事によりてその高度を異にす。元より南部は北部より溫かきが故に、雪の消ゆるとも早きが常なれども、ヒマラヤ山の如きは、實に例外にして、山の北部は非常の乾燥せるも、南部は甚だしき降雪あるがため、山の北は南より高きと四千尺の差あり、コーカサス山は一萬千餘尺、フォリニー山は

八千餘あり。
雪の降る時は、他の時に比して空氣最も清淨にして、人々の精神引き立つは、雪の功用上として忘るべからざるとなり。

史　談

佛國革命の花

（ローラン夫人の傳）五

斯くて革命の勢愈々急にして、八月十日王路易十六世は終に廢せられて幽閉の身となり、王政已むで共和立ち、立法議會は其まゝ變じて民選議院となり、行政會議設けられて、ローラン亦內務の職に復せり。廢王の一事は重に山岳黨の力になれりと雖ども、ヂロンド黨また之を贊する所ありたるなり。
今やローラン夫人の夢想は實際となりぬ。王政は亡びぬ。共和は立ちぬ。民は克ちぬ。山岳黨もヂロンド黨も暫しが間は並立協同して、ブリッソオローランなどの名はロベスピールダントンマラア等の名と並び稱せられぬ。アヽローラン夫人の夢想は今や實際となりぬ。然れども、誰か思はむ、禍機は已に此時を以て熟し來らむとは。
一豺纔斃進一虎、上なる一敵已に斃れたるの時は下なる大敵の翼まさに成れるの時なりき。ローラン夫人は今や吾が激成鼓舞したる革命の急潮に捲き去らるべき運命となりぬ。
滔々たる大河の流れは支ふ可からず、騎虎の勢は制止す可からず、革命の足歩は控止す可からず。ローラン夫人は已に王政を倒さんが爲めに檻を開きて革命の猛獸を放ちぬ。猛獸は王政を噬み斃して、今や一轉して番人其者に向へり。ローラン夫人は人民の勢力を以て議會を動かす可きを說きぬ。今や議會は全く人民——

暴民――革命の氣に醉狂せる人民の手に落ちなんとせり。ローラン夫人の素志は革命によつて王政を倒し、王政倒れて共和立たば、直ちに建設的の政策を以て秩序ある新天地を築かんとするにありき。然れども一たび大踏歩して動き出でたる革命の巨人は、一歩一歩に速力を增加し、愈々哮りに哮りて眞正の共和と其主張者までも脚底に踏みにぢりて猛進せんとせり。革命の足歩を共和の立脚點に於て喰ひ止めんとしたるヂロンド黨、ローラン夫人、ローラン等は、月を終へずして巴里の衆民を敵にするの已む可からざるを見出しぬ。此時に當り依て以て此巴里の衆民を制馭す可き者唯一人ありき、山岳黨のダントン是なり。ダントンは行政會議に於てローランの同僚たり、議院に勢力あり、人民に人望あり、正に以て此難局に當るに便なりき。然れどもローラン夫人はダントンを好まず、夫人の想像にはダントンと云へば常に短刀手に取て暗殺を慫慂する男としてあらわれ、王政未た倒れざる內は兎も角も、今は斯る急激の手段を用ふる必要なしとて、夫人は殆んどヂロンド黨に取り唯一の安全の道なる此同盟を拒絕せり。婦人にして單純の理想家たるローラン夫人が、斯く實地の見に乏しく而して執拗如斯くなるも亦怪しむ所なきなり。ダントン自からも進むで此同盟を爲さんとし、每日の如く夫人の接客室に來り、官僚正餐の前に談話をなさんとて常に例刻よりも早く來りしも、八月末に到り共に爲す可からざるを見破つて再び來らざりき。已に人民を敵とせるローラン夫人の一黨は、今や其人民の上に大勢力ある山岳黨を敵とせざる可からざるに到れり。

血を以て佛國史上に其姓名を書す可き山岳黨は、此年九月初旬巴里の獄中に繫げる王黨の囚人を屠殺して先づ無政の魔神の犧牲に供したり。此時に到つてローラン夫人は已に山岳黨の爲めに賣られたるを悟れるも已

に晩かりしなり。月の五日、夫人一友に書を與へて曰く、我等はロベスピール、マラアの刀下にあり」と。其九日の書に曰く、我友ダントン君は何事も指揮す、ロベスピールは彼の傀儡たり、マラアは彼の松明と短刀を握る、余が革命に熱中せし事は卿よく之を知る、ア、余は之を恥づ、革命は無道の爲めに汚れぬ、革命は可厭なれり、今日此位置に止まるも恥かしき限りなり」と。可憐、志高ふして實地に迂なるヂロント黨は、全く山岳黨の爲めに出し抜かれしなり。是れより後、巴里人民山岳黨の勢は潮の如く共和の城も城上に立てるローラン夫人ヂロンド黨の一團をも滔々として押し流し去れり。

時勢日に非なり、然してヂロンド黨は猶ほ此勢を喰い止むるに力を吝まざりき。ローラン夫人は愈々黨の諸士を鼓舞せり、曰く、我等已に自からを救ふ能はずとも、少なくも我等をして我國を救はしめよ」と。議院に於てはブゾオの聲、政府に於てはローランの聲、曾秩序恢復、共和確立、亂暴制止、王政遺孽芟除、山岳黨控制に盡力せるも、是れ水泡に過ぎざりき。ローラン夫人の名は議院に嘲けられ、マラア等の新聞に凌辱され、ローラン夫妻の生命は暗殺の企ての爲に危く、樣々の讒誣虛搆の隱謀はローラン夫妻を陷れんが爲めに設けられたり。斯くて山岳黨は勢に乘じて千九百九十三年一月二十一日ヂロンド黨の大反對をも顧みず、斷頭臺上に王路易十六の首を馘り了んぬ。明日ローラン其職を辭せり。

路易の死刑はヂロンド黨覆沒の豫報なりき。已に久しく巴里の民に結んで其勢力を養ひたる山岳黨は、先づ王を殺し、次ぎにヂロンド黨を苅り去らんとせり。五月盡日の夜、捕吏はローランの家に來りぬ。ローランは捕吏の手を脫れ去りぬ。而してローラン夫人は其夜の内に捕はれて、悲泣する愛孃婢僕等を慰めつゝ、アッ

ペーの牢に入りぬ。

理學者チンダル氏の傳

大哲學アリストートル、熱と光の起原を論じて、諸遊星が空中を迅速に運動する摩擦によりて、生ぜるを說きてより、遂に熱は物躰の分子の運動の際に生ずるものなりと云へる、今日の學說を生するに至るまでは、種々なる學說は學者の間に起りしが、中にもチンダル氏の熱の論、及びダイヤマグチット論ほど此類の學術に大なる進步の速力を與へたるものはなしと云ふ。

チンダル氏の名を知る人は、よも忘れ給はざるべし、數十日前の新聞は、チンダル氏が妻君の過誤により、過つて毒藥を飮みて、七十四歲を一期として果て給へりと報じたるを、我等の目にては、無益にして有害なりと思ふが如き人物の、長が〳〵と生存するを見、一方にはかゝる有益なる學者の、訃音を聞く時は、天はいかなれば無用らしき人々を長らへしめて、有用の人を短命ならしめ給ふかと思ふとあれども、こは人類の淺はかなる考へなるべし。チンダル氏の如きは、地上に光の輝やく間は、その美しき名聲、その有益なる行爲と、共に幾く久しく世に傳はりて、末々までもその助を受くべければ、已に人類としての職分は、十分に之を盡くし給へるものなれば。

英雄てふ語は必ず戰場に臨み、血を流し骨を碎たるものゝ上にのみ加ふべき美名にはあらずして、たとひ階上に蟄居するも、書籍と頸引きの間に果つるとも、數百年來蟠て解けざる、大問題を解くこと、快刀を以て亂れたる麻をたつが如くにして、萬世を益する學者をも、英雄と云ふべきは、チンダル氏の生涯を見たるものゝ、諾せざるべからざる事なるべし。

チンダル氏は、千八百二十年、アイルランド國レーリ

ンブルーグの片田舍に生れけるが、父母の家は極く貧づしければ、貧家の子に普通あり得る健康と、氣力の外、何物をも此子に與へざりき。氏が小兒の時分には、その仲間の朋輩と同じく、近かくの村里を走り廻り、或は遠からざる田舍へ旅行するを以て、最上なき樂しきことゝ思しが、此く東西を歩行して、小鳥の囀づる美はしき歌、愛らしき花の色、宿驛村舍の有樣を見たることは、少からざる益となりしが、尙ほ他に一つのものありて、氏の成功を助けたり。そは氏の父母は、堅たき宗敎主義の人にして、家の書棚に並べたる書物は、悉どく聖書のみなりければ、子供の時分には何の面白味もなかりしが、稍年長じて舊約聖書の中にある自然の事物を記せる高妙の文字を見ては、其想像力を增加せること、甚だ多かりしは、後來大發明を爲すの助となりしこと、極めて深かりしと云ふ。

チンダル氏も、今は十九才の靑年となりしが、算術の外、別に優れる才なく、しかもその算術さへ學校を出づる二年計り前より、稍發達せるのみなりき。またその學校を去りてより職業を得んとの目的より、機械學を學ばんため、或る學校の豫備校に入りけるが、三年の苦學は最も滿足なる進歩を顯はせり。

千八百四十二年のことにてありき、氏は工科學校の敎授をなして、その學びたる所を、彌よ深く究めんとしけるが、益々深く入るに隨ひ、益々深く面白味を感じ、五年の後遂に機械學を修練して、非常の成功ありき。

僻村の一少年、しかも貧困身にせまりし一少年、今や擢ばれてクヰンウード大學校の敎師となりしが、天より受けたる才能は、この敎授となりて、衣食に安きを得たる後も、進歩を止めず、日一日と化學理學の趣味を增し、遂に生國に滿足せずして、遙かゼルマンの高等なる大學校に入り、滿足なる學問をなさんと欲せり

行きたる先きは、ヘスカセルのマルボルグなりしが、

二年の間此にありて、饑へたる犬の食を貪ぼるが如く、夜を日に次ぎて、大に學業を勵みたりき。氏は元來資金の少なきがために、早く此學校を出でたしと思ひ、或る時は十六時間の長き勉强をもなせり、或る時はつら〳〵資金の漸やく減ずるにつけて、その將來の望みの成功するや否やを考へ、種々なる疑ひにかこまる、こともありき。されどその理學を以て世に立たんとの決心は、遂に動かざりしが、理學を以て萬事を說明せんとするその著しき氣象を與へしは、實に此平和なる時にありき。

氏は有名なる化學者ブンセン氏に就き、電氣化學とて、電氣の作用によりて起る、化學的變化の理を究めたるが、これと仝時に熱の光線、即ち太陽の熱が光を發つて地上に達する如く、熱は熱したる物躰より光を發つて來ることを研究せしが、これぞチンダル氏をして、經驗を積ましめ、一大發明を爲すに容易ならしむる階段なりき。

これより先き、フワァラデー氏は學者社會を動かすべき大發明を爲せり。そは地球上の凡ての物は磁石力を帶びたるものと、ダイヤマグチット（ダイヤマグチットとは不順柔性と譯して磁石力に反對するもの也）の二種となすを得べしと云ふにあり。今磁石質の棒を取りて、二本の非磁石質の物の中央に下ぐるに、棒は非磁石質の兩端に吸ひ付けども、もし之に反して、ダイヤマグチット（非磁石質）の棒を、磁石質の棒の中央に下ぐる時は、磁石質の棒は、遠く遠ざかりて、ダイヤマグチットと十文字の形をなす、是れ其證據なりと。」

然かるに、茲に奇異なる現象は顯はれたり、そはこゝに一のダイヤマグチット質のものあり、此者元來はダイヤマグチット質なるに、之を結晶せしむる時は忽ち一變して反對なる磁石質となるとなり。今ま蒼鉛と云ふ金屬の一片を取つて、磁石の棒の間に下ぐるに、磁

石は蒼鉛に吸ひ付けども、蒼鉛の結晶せしものを以て、上の如く試驗を爲すに、蒼鉛は忽ちダイヤマグチツト質の實を顯はして之を遠ざかるべし。

チンダル氏は、この面白き現象に付きて、尚ほ一層に深き研究を爲さんとて、七年の間、夜を日に次ぎて勉勵せしが、その功空しからず、結果は遂に遙か先哲の上に出づるの發明をなすに至れり。即ち我等の家の火鉢に用ゆる、木炭と同じ木炭が結晶して、貴人の指環を飾る、美しき金剛石となり。通常人の足に踏まるゝ土の塊が、碧玉ともなり、赤寶石とも變ずる、秘密の力、即ち結晶力に付きては、幾百年來學者の腦味噌をかき亂しけるが、チンダル氏が好結果を顯はしたりと云ふは、即ち此の點にあるなり。

チンダル氏の言によれば、ダイヤマグチツト質のものが、結晶躰となるや、全く反對の作用を顯はすは、物躰の構造の如何に由ると云はざるべからず、言を變て云ふ時は、分子が結合して物躰をなすに當りて、一種特別の結合をなすによると云ふにあり。この發明はたゞに、金剛石や赤寶石の如き一物躰に付きての特性を證明せるのみならず、深くその眞理を探究する時は、彼のニユートンが引力を發明せし如く、地球の引力に關する實に驚くべき秘密の問題を明かに説明して、學者社會の謎を解釋するに難からざるべし。氏は其外兩極性とて、或る物が一方の磁石を引き付けて、一方を遠ざくるの力は矢張ダイヤマグチツト質なる事、及び磁石の引力はダイヤマグチツト、即ち非磁石力より二百五十萬倍の力あることを發見せり。

又た人間が世界に生活する理法と、自然との關係は、たゞに學者のみならず、何れの人も知らんとを欲する問題なるが、氏はその點に向つて、更に研究を始めけるが、之れより空氣が太陽の熱を吸收するの力に付きて、大に世人の注意を引くに至れり。

これより先き、イタリーの理學者メロニー氏は、透明躰の中にても、岩塩は最も良導躰にして、殆ど全く熱を透すと雖も、同じく透明躰にして硝子は大に導方を減じ、明礬、氷等は、一層少なく、水晶は殆ど不透明のものと同じ位の導力を有することを試驗して、大に理學社會を裨益せしが、チンダル氏は更らに進んで、瓦斯蒸氣等の熱を引くこと、或は發つことは、大に固形躰及び液躰に異なることを發見せり。

其他濕氣のある空氣は、乾燥せる空氣よりも熱を含むと多してふ理は、全く氏の發見せし所なり。乾燥せるサハラの砂漠の夜半の嚴寒も、中部アジヤの非常の寒むきも、全く空氣の乾燥せるなりと云ふことを、いよ〳〵たしかめたり。

それよりも尚ほ面白きは、太陽の光線の中より、見ゆる光線と、見へざる光線とを分ちしとなり。その發明によりて、世人は暗き所にも、花の開く道理を明に知り得るに至れり。又た氏は此の理によりて、火事場に働く者のために、呼吸器を發明せしが、此器械は濕氣ある毛織と、乾きし毛織と、木炭の小片と、燒石炭等を、鐵線紗と云ふものに包みたるものにして、これを用ゆる時は、如何に熱くして煙の甚だしき火事場に働くとも、呼吸に困る恐れなくして、その便利なること言ふべからず。

それのみならず、青天の時には、聞きも得ざる遠路にても、雨天の時は、近〳〵と響を聞くを以て、漁師が口笛、鐵砲等の合圖の間違ふをいぶかりしが、チンダル氏は濕氣ある空氣は、熱を能く保つ如く、音響をも保つことを發明し、薄き金屬の面を光線にて打つときは、音樂を奏することを見出だせり。

かく世界が始まりて以來、働ける理法にして、世界始まりてより長く解けざりし道理は、僅かに一學者の腦を以て明かに說き盡くされたるもの多し。其功元より

少なしとすべからず、されども氏は發明者として稱せらるゝよりも、むしろ平民的の理學者として世人に稱へられき、高尚にして俗間の知りも得ざるが如き理學を、平易にして面白く一般民間に讀み易すからしめ、行き渡らしめしものは、實にその一生の事業にして、チンダル氏出でゝ、民間始めて理學を知り得たりと云ふも、殆ど過言にはあらずと云ふべき程なりと云ふ。

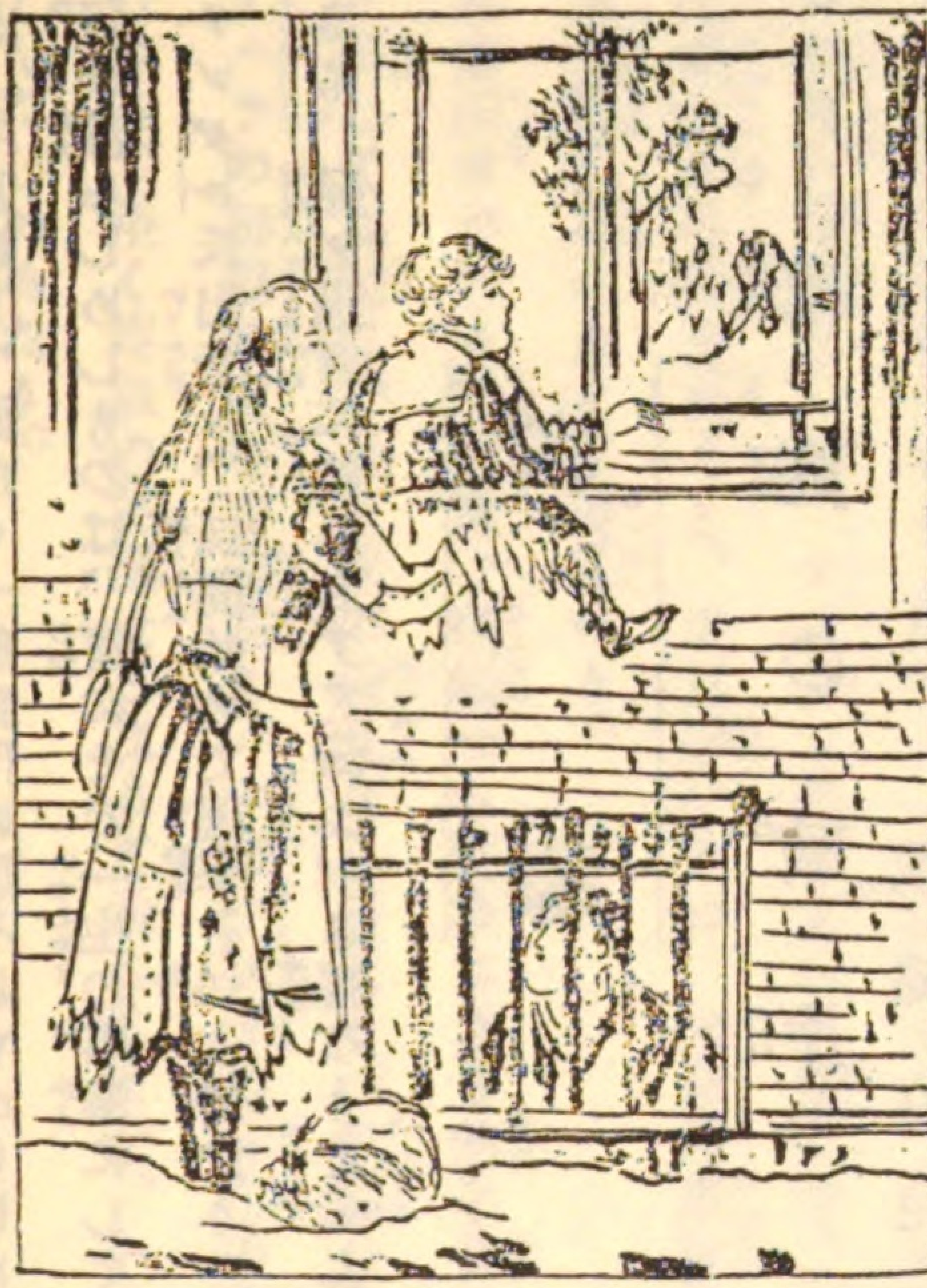
文藝

家庭の破片

筑峰女史

ところは極月の末なれば寒風凜烈吹きすさむ折も折とて、日暮より降りしく雪にいつこを見ても白妙に行かふ人の跡も絶え、只寂只寞として物凄きまで靜かなり、こゝは英吉利のある市の町はつれいと裕かなる家の前、年をも行かぬはらからがたどりてこそはつきにけれ、此の二人の者共は吹雪にかさをとられしか、身はぬれ鷺のそれならで立寄る蔭もなさけなや、姉は十四になるやならぬのせばき其身をたてとなし、十才にもなりつらんかよわき弟を助けつゝやう／＼こゝに來りしも情を乞ふべきすべなく泣き出さんばかりなり、折から寒さ次第にせまり來て今は總身こゞえ果て、姉すら弟をなぐさむ力もいつか消え失せて、たゞ忙然とたゝずむ軒下フト見上くれば、窓の戸ざしを忘れしか硝子越しによく見ゆるものから、眼を注けば、家の内は數點の燈火に晝より明く、窓きはには降誕木善美をつくして飾り立てられ、家族一同打まどりいのりの聲もかまびすくいと樂しげなり、其内にわきて其家の子供等は嬉しさに躍り喜ぶ有樣を見る、姉は弟にも此のありさまを見せたくなりて指示せど身の丈足らねば唯樂しの聲きゝてのび上りつゝあせるゆゑ、姉は見兼て抱

き上げせい伸びさすれば、弟も我を忘れて打のぞけば、殆と己れと同年の子供の喜びありく蔭も見え、あれほと美麗な誕生木なくとも責めて父母と暖き部屋の内に寐て降誕日祝はゞいかによからんとイト羨ましげにう



ちなけゝば、姉は慰めんとすれと胸せまり、涙見せじと食ひしばり、漸々にこゝろを勵まし、弟にむかひかはりやすきは世の習ひ、なき父母を慕ひつゝ悔むも詮すべなかるへし、唯天にまします我等が父よ、憐れ不幸の者共を憐み救ひたまへよと、家内の「ピヤノ」の音に合せ讃美歌にて弟の意をそらしてぞ居たりける、」

此の家の前はなとてしも行き過ぎ難く、はらからは見とれて餘念なかりける、こなたは下女かそれとも知らで思はず見上ぐる街上の窓下に何かたゝずむは盗人ならんと能く見れば、それならでいとも可憐の幼き乞食なり、下女は忽ち愛憐の情に動され、パンの殘りや肉の切れとりあつめ、是皆主人のものなれば無斷にやるはあしけれどさぞやひもじくありぬべし、之も恵の爲めなれば後にて主婦にあやまらん、げにこそと、ひそやかに臺所口推開けるに、二人は大に驚きつゝにげんとするを呼びとゞめ、さな驚きそ、あまり不慣な御身等が其の有様を見るにつけ日頃案ずる我が妹弟の事も思ひ出らるゝなり、之を妾が志し、饑を凌ぎてたまひねと云へば、二人は喜びつゝ、厚き恵を幾度も謝し

てぞ、雪をふみしめて過ぎ行く影を見る下女は、何か心にうなつきけん、急ぎ再び呼び戻し、御身等は見目かたちさほど賤しからぬ身でありながら、いかなればかくをちぶれたるぞと問はれて、姉は瀧なす涙とゞめ兼ね、我等は遠き在所の者なるが、日頃よりまゝ母上に折檻せられ、憂き年月を送るうち、此の頃父上は病にかゝりむなしくなりし其の後は、母はます〱我等を惡ませたまひ、遂に我等をふり捨てゝ他家に縁づきたまひし故、跡に殘るは妾と弟二人のみ親戚とてもあらざれば、今はたつきの道も絶えいかゞともせんすべもなく、泣明せしが、此の上は幼き時に別れてし姉上の行衛は確に知れされどこの里ちかくに見し人の有りとほのかにきゝしかば、遭ふて相談する外に術もなく、住みなれし家をばあとにはる〲とやう〱こゝまで來つれど、所番地も知らざれば何を見當に尋ぬべき、唯神よ導きたまへと祈りつゝ、さまよふ中に、計らずつれなき雪に五躰は冷え、進む力もなくなりて、此の軒下にやすみしと、涙と共に物語れば、下女は二人の顏をツク〲詠め、ヨモヤそなたは妹のマーサにはあらじと問はれ、驚く妹の不審の顏色を見てとり、下女は疑ひやるも道理なり、妾か故郷を母上の爲めに追ひ出されしはチヨウド六七年前の事にしあれば、そなたは八ツになるならず、弟は漸く三ッ四ッなれば、見覺えもなかるべし、我こそはそち達か尋ぬる姉のエリザなり、よくも成人せし者よ、よくも訪ひ來てたまひしよ、あなうれしやと、二人を抱きしめはらから三人かたみに六ツの袖をしぼり、身もうくばかりの悲しさ想ひやるだにあはれなり、

姉はやう〱身を起し、かくして居てもなどりは盡きし、まづ臺所まで來たれよかし、願はず入るゝはあしけれど委細の事を物語り後より主人の御許を乞はゝよからん、イザ〱と臺所につれゆきて、石炭少しかま

どにくべて痛はりあやせは、妹は地獄て佛の心地して嬉し涙にくれけるが、弟は奇異の顔色にてあたりを見廻す斗りなり、ほどなくいのりもすみければエリザは心きやめつゝ二階に上り、主婦に向ひ、日頃に増してうや／＼しく禮儀を正し、誠にあしき事して侍り、實はあまりに不憫さと嬉しさの堪へ難きに御ゆるしも待たずして、妹弟を乞食と思ひ食物の餘を與へし其上に誘ひ入れし一伍始終を物語れば、主婦も共々涙ぐみ、是までおやまち無きそちが改まりたる躰たらく何に事ならんと驚きしが、左樣な事とは夢さら知らず不憫のはらからつれなの母親や、げに浮世はさま／＼なり、必ず心をくなかれ、幸ひあすは降誕日かく廻り逢ふは皆神の導きならんと喜びて、臺所に馳せ下り、二人の樣子を見る所愛きにやつれはしたれども賤しきものとも見えざれば使てやらんと打うなつき、やがて妹は姉の手助に弟は玄關番に定めければ、はらから三人も恩義に感し、いとまめやかに勤め勵めば、主人等もとよなき者と慈愛しみ、萬事不自由無き樣に氣をつけやれば、三人は殆ど我家にあると同樣の思ひを爲すと諸共に、姉が常々これ皆主家の御蔭ぞと片時忘れず説き聞かすれば、妹も弟も一心に勤め大事と怠らでいとまめ／＼しく立働けば、主婦はよき召使拾ひ得たりと滿足し、樂しき家庭の一部分となせし爲め、破毀れたる家庭の缺の三人もいと幸福にこの世を何不足なく暮しける、是皆信念、慈愛、憐憫の感謝、報恩の功德とこそは志られけり、

勉學を裝ふ子（上）

霞村

第一場　伯爵及夫人

伯爵　何うも秀磨にも困惑じやないか、御覧よ!! 庭園

を逍遥ながら何やらん讀む擧動じやが、何様眞箇に讀む精神で讀むのではなく、唯だ他人が自分で讀んで居るのを見さへすれば能事畢矣と思つて居るのに違ひない。あれでは些少も利益になるまいと予は考へる。

夫人　何んで吾夫は左様にお考へなさいますか？

伯爵　其の證據は今此處を讀むで居ると思へは瞬間后に彼處を讀んで、少しも同一箇處を見ては居らない。唯だ讀んで居る擧動をする計りじやものを。

夫人　其れでも吾夫！　學校の教師は毎時、秀様は、誠によく勉強して少齢にも似ない、分解もよく、出來もよいと申して居りますよ。

伯爵　否！　假令他人が何程賞讃ても當にはならないよ。予は結極賞讃られない方が百倍増しだと思ふ。右の耳から聞て直に左の耳へ抜かして仕舞ふ底の人間よりは、學問は出來なくとも、眞面目で、正直で、從順つて、而してよく働く人間が、何程貴重か知れない。

オー噂をすれは影とやら、茲處へ秀麿が來るは〳〵。

秀麿は富松を押し遣りつゝ。

第二場　伯爵及秀麿

お前早く彼處へ去よ。毎時でも〳〵人が勉強しようと思へは來ては邪魔計りする、眞箇に好ない馬鹿な見たよ！

伯爵　秀麿は何故富松を馬鹿見なんと言ふのです？

秀麿　其だつて父様！　富松は何事も知りませんものを。

伯爵　成程お前が知つてる事は知るまいが、又お前が知らない事を澤山知つて居るから、決して馬鹿なんて言ふては可ません。

秀麿　父様其でも私は富松に何事でも教へるとが出來ますが、富松は何物でも私に教へるとは出來ません。」と聲を少し低下して

アの富松が何を知つて居ますものか！

伯爵 好し〱、其ならば直樣お前が予に代つて、財產も監督もし、傭人も使役として御覽!、其時お前は櫻の木はどんな樹だか。菫の花はどんな花だか。小麥は何時蒔くものだか、米は何時獲るものだか知らねばならないが、最う知つてお居でか。ヱ知らない。ソレ御覽! 富松は既往から皆よつく知つて居て、お前に敎へることが出來ますよ。

秀麿 それでも父樣! 私は富松如き平凡な兒からは聽きませんよ。

伯爵 ヱ富松は物は出來るか聽くのは嫌忌じやとお言かへ。何うしてお前はさうのだらうナ。彼兒は實に活潑で、怜悧な善良兒だ。そして代々予家の小作人だ。地位こそ違ふが彼兒の親爺と予とは年少い時から中よくして來て、此方に慈惠をかけてやれは、彼方では忠實に恩を報す樣にして居るのだ。どうかお前も其樣にしてお呉れ。ヱよいか。

伯爵は出て行く。跡には獨り秀麿舌をペロリ出して。」眞實に善い友人だ! 物識だ! 妙々玆處に來るは。とれ一泡吹かせて呼吸の音を止めてやらふ。

第三塲 秀麿及富松

富松 若樣! 此花を差し上げませう。

秀麿 花つてなんだ業々しい、此樣なものを! せめて爵金香でゝもあればよいに。

富松 皆野花ですから左樣美しいとは勿論ありませんが、野花は又野花丈の趣きがあつて中々美事です、私は若樣は如此なお花も御覽じたり、名をお覺えなさるのが、お好きと存じて居りました。

秀麿は鼻の先にて

フン野花の名を覺えろッて。失敬な、一躰生意氣じやないか。面白くもないハ、取て來た處へ持つて置けッ!

富松 デモ私は仕事を仕舞つて急いで歸途に月明りで折つて來ましたが、大層疲れても居り、餓じくッても

居ましたから、場所は分明記臆て居りません。
秀麿　お前今月とお言ひたが、月は何程位大きなもの
だが知つて居るか？
富松　左樣ですねー、苹菓餅位でせう。
秀麿　ハ、、笑はせるは田舍兒！
態と高慢なる態度にて起ち又坐りつゝ、傍の書棚より
一冊の書籍を取り出して。
オイ立派だろう、是は英吉利といふ大層遠い國の歴史
といふものだ。お前讀んだとがあるか。
富松　其は小學讀本にもありませんでした。私は只今
始めて伺ひました位のものでムります、奇麗ですこと
！　何卒少しお見せ下さい。
秀麿は書籍の一端を片手にて押さへながら、
觸つては可けないよ、汚れるじやないか、オヤお前毛
皮の手套を着けて居るネ。何時何處で買ッたの？
富松　ハ、、若樣、私は手套なんぞ着めては居ません。
手で御座います。痛た！　そう引張ッてはいけません。
手の皮です。
秀麿　何に手だッて！　革を柔すのに其では少し强硬
すぎるだろう。
富松　若樣の御人の悪い事、是は私の自滿する處なの
で御座います、御覽遊ばせ、怠惰て居て中に此うなる
ものじや有りません、若樣の御手は人形の手の樣に美
麗しうは御座いますが、假令どんなに美麗しくも私は
交換こう致しません。私は常時人に申して居ります。
私が獨立で生活しなければならない。オ、談話で遲
くなつた。左樣なら。

第四場　秀麿

秀麿　忌々しい、彼奴我を嘲弄しやがつた。行つて撲
つてやらふかしら、まかし誰か來る樣だ。此うやつて
居よふ。
忽ち危坐して熱心に讀書する風を爲す。

＊　＊　＊　＊

伯爵夫婦友人を案內して來る。

夫人　夕榮が一入の眺望です、方々と丘で此の美い夕景色を觀ませう。秀坊はお出でないか？

秀麿　ハイ折角有り難ふ御座いますが、私は少し調ものがございますから。

人々相提へて小丘へ上り去る。

＊　＊　＊　＊

秀麿は忽ち書物を閉ぢて衣囊の裡に押入れつ。

曾行つて仕舞つたら、僕が行かないのを何と思つたか知らん？　僕は此んな時こそ翼が欲しい、鳥になつて母樣がお客樣に秀麿はよく勉强しますなんて自慢するのを聞きたい。

欠伸一番、やをら身を起し、

一寸の間に非常に暗くなつて來た。最早程なく歸るだらうが、此儘では面白くない、何うしようか知ら？森の中へ隱れて見やうか、さうすると母樣はあの性質だから心配して奴僕に搜索する、奴僕等は搜索しながら僕の風評をする。中でも久七は僕が常に噺して聞かせたから、昔時理學の事計り考へて道路を忘れた哲學者の樣に、若樣は學問にお凝りあそばして、森の中でお迷なすたのに違いない。是は頗る妙策だ！。

と窃地に森の中へ走り入る。

第五場　伯爵夫婦及友人

伯爵　ナント誠に穩な良夜ではありませんか。

友人　左樣ですネ、時に失禮ですが夫人は何か先刻から進まぬ御容姿に御見受申しますが、御氣分でも勝れませんか？

夫人　ハイお客樣のおるに物案事抔しまして失禮で御座いますが、實は秀麿が見えませんので……吾夫何う致したのでございませう？　其處に居るのは誰？久七かお前今秀麿を覽なんだかへ？

久七　彼是二十分も前でしたらう　お一人で森の方へ駈けつていらしつた樣でした。

夫人　何！　森の方へツて、何故お止めでない、困るじやアありませんか、一人で歸るとは出來まい、これ久七早く行つて見てお呉れ、何をぐづ〳〵して居るのだェ。

久七　唯今、ハ、、ハイ。

友人　夫人決して御心配なさいますな、私共も共々捜索ませうから。

夫人　どうも濟みませんですェ、其では御苦勞樣でも

……

伯爵　ナニ直に見えませう、何卒御心配下さいますな、否何卒此ばかりは御止め下さい。

友人　森の中でお迷では無お困りなさいませう、兎も角も捜索ませう。

出て行く。

雪の朝

片々たり、又霏々たり。

雪いたく降りしきる或る朝、道行く人の積雪中に倒れて起きも得ならぬ一兒を見出だしたるがありき。彼は烈しき吹雪に傘の持ち能はざるが爲め大なる笠を被りしなり。而して笠の上に漸く降り積みたる雪の重きによろめきて地に轉びしなり。まだ十歲の小兒なれば。

之を見たる道の人は、憐みて彼を抱き起せり。問ふ、

『御身は何處に去るや』。

『兒は學ばんが爲に師の許に行くのみ』。

『かく烈しき雪を冒しては年長けたるものさへ歩むべくもあらず、如かじ早く家に歸りたまはんには』。

『否、兒は師の許に行くべし』。

彼は遂に辛ふじて師の家に至り、其常の日に於て怠らざるが如くに、此日に於ても亦怠らざりしといふ。彼とは？ 小さき小川泰山。師とは？ 有名なる山本北山。

＊　＊　＊　＊

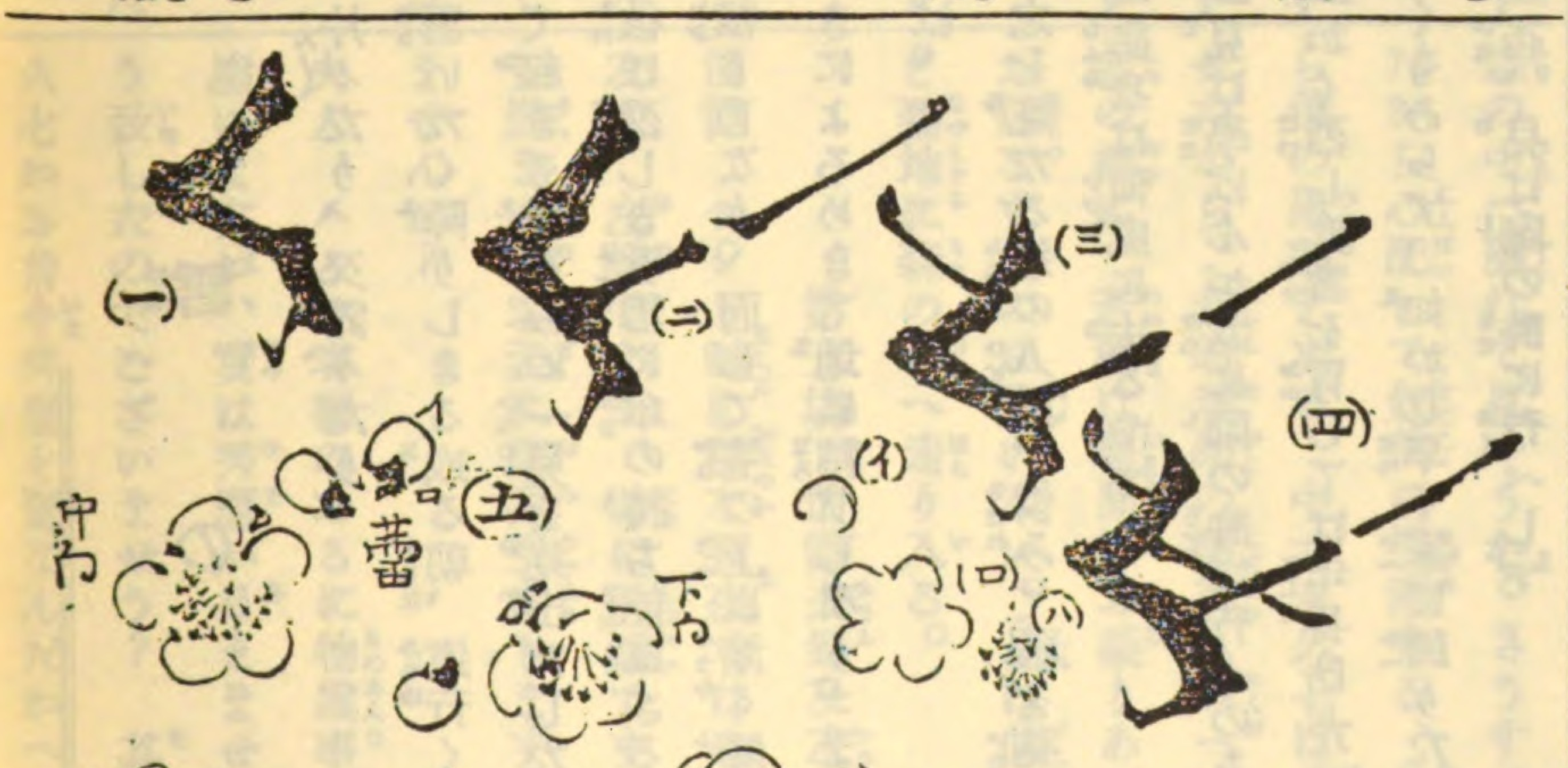
家庭子曰く、『時に及んで須らく勉勵すべし、歳月は人を待たざるなり』。

繪　畫

畫學の栞（二）

金　仙

春風纔に簷端に訪れて、窓前の一枝はやくも清香を吐くもの幾點あり、寒晨に傲るの梅花、之を紙上に落して筆端に花を生ぜしむる、亦一興ならずや、



梅花一枝、

梅幹はすべて女字の如く畫くべし、

（一）は梅幹の大體を定むるものにて、筆を上より下にく字形に畫き、終りに筆をはねるなり、これ枝を折りし木皮の意、

（二）下より上に向ひて、中途にて筆を止め、少し間をあけて、更に筆を續く、これ花を着くる爲めなり、

（三）上より下へ、

（四）は（三）の返し筆にて下に運びて止む、

（五）梅花、

別に梅花の運筆を說かんに、

先づ（イ）の如きつの字形を五ッ四方よりあつめて圓形となすべし、即ち（ロ）の如く、

（ハ）は香にて花の向きによりて寫すべし、

（ニ）は花の蕊なり、中心に一點を附す、

蕾は（イ）前の如くつの字形を畫く、（ロ）は花の苞なり、

又枝の位置を見て處々に點を附すべし、見よ完備せる第六圖を、

因に記す、此畫木板墨一板摺のものなれば其墨色を示すによしなし、若し實地に之を畫かんとする人は、まづ梅の幹のみ墨を濃く筆を靜肅に力を籠めて運び、梅花などは墨色を淡く筆を輕くつかひ、香は濃き墨にて點すべし、

無聲詩話

（十一）

隋唐の畫法を採り之れに國風の美想を加味したりしもの、是れ我が王朝の繪畫にして、鎌倉時代に至り、遂に全く日本化せんと欲せしが、室町の世宋元畫の輸入に會ひて更に硬性の一派を生じ、舊日本畫の軟性にして穠麗を主としたるものに反對し、專ら氣骨風格を尙

びしことは、吾人が曩に說述したる所の如し。而して此の兩者の間に立ちて、其長所を併せ、宋元畫及び倭畫を折衷し、別に品格ある一派を出したるもの、之を狩野派となす。

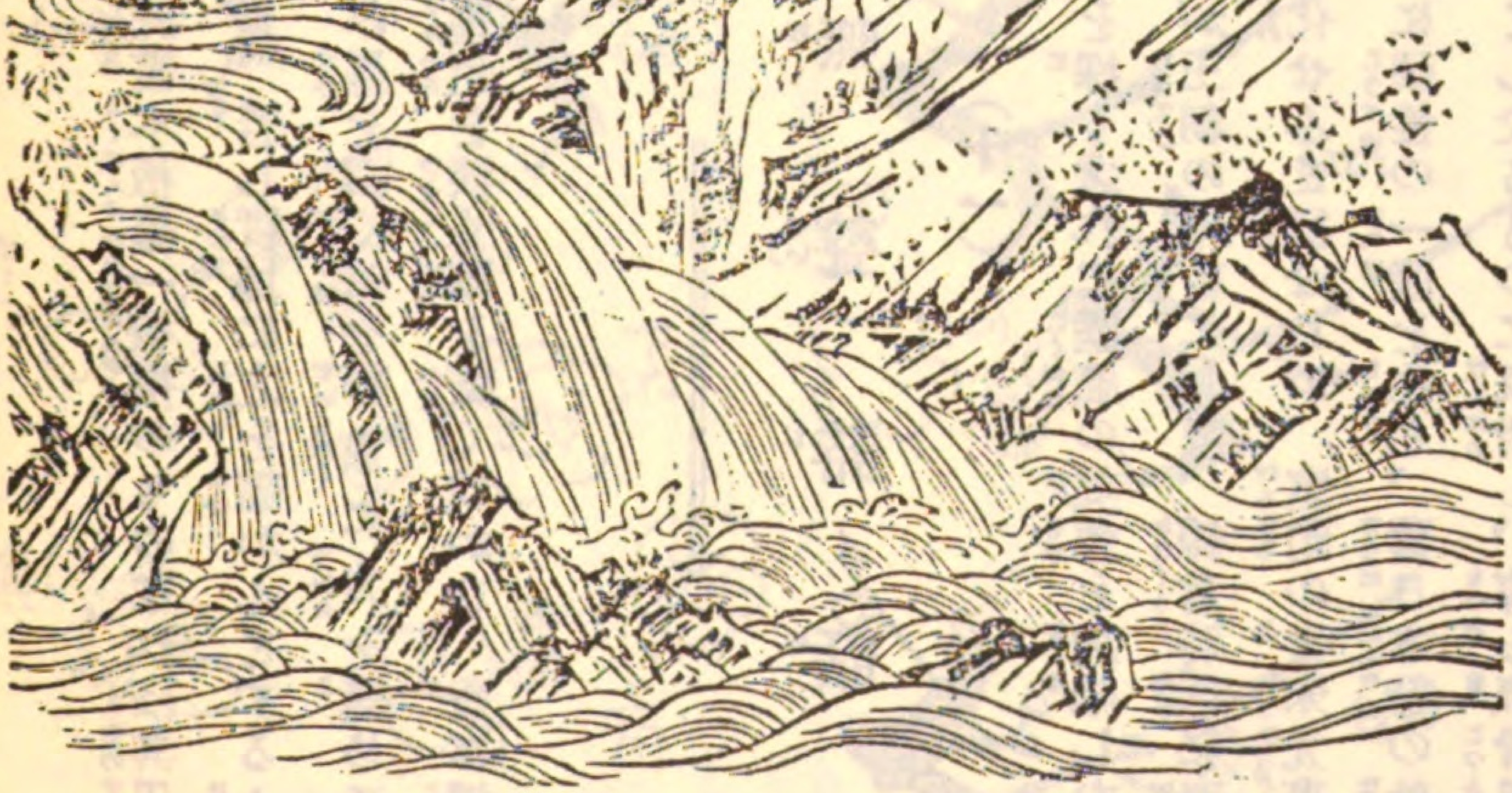
狩野派は東山義政の美術愛翫時代に興り、後江戸時代の寵遇を受け、遂に近世期に於ける日本繪畫の覇者として永く天下に雄視し、以て今日に至れるものなり。

狩野四郎次郎正信、實に之が祖先たり。

正信は藤原氏大炊助と稱し、薙髮して祐勢又祐清友清といひ、永仙と號せり。相州小田原の人にして東山義政の侍臣なりき。

彼が畫は小栗宗丹を師とし、宋の梁楷を學べり。人物を其得意とする所とす。

義政嘗て宗丹をして金殿の畫を作らしめき。而して宗丹は畫未だ成らざるに沒しぬ。後雪舟明より歸るに及んで、義政之に繼ぎ畫かしめんとせしに、彼は遂に正信を薦めり。是れ正信が丹靑を以て身を立たる始にして、彼は因て一家をなし、終に法眼に叙せられぬ。



元信筆

沒する時後土御門帝の延德二年年三十八といひ、或は後柏原帝の天文十九年年九十七ともいふ。

傳ふ、正信嘗て花鳥の圖を作るや、蝶兒あり栩々として飛で畫枝に宿せりと。又傳ふ、嘗て雪樹の圖を作くるや、雀子あり翩々として來つて畫梢に息へりと。未だ其事の眞否を知るべからずと雖、亦以て其畫の如何に巧妙なりしかを察するに足るべし。

而して彼に繼て遂に狩野の一家を大成したるものは、世に名高き古法眼元信なりき。

彼は正信の長子、土佐光信の聟、俗稱は四郎次郎後大炊助越前守、畫所預となり、法眼に叙し、永仙又玉川と號せり。宋元畫及び倭畫の折衷は實に彼が手に成りたるなり。其人物山水は馬遠夏珪牧溪玉澗子昭顏輝を取り、花鳥は趙昌舜擧をまじへ、倭畫は信實光信を斟酌したりといふ。筆力勁厚にして幽致あり。

其畫の妙は、世傳へて、彼が京都神泉苑護國寺の保元平治合戰圖の屏風に、夜々闘爭の聲ありとて、之を閧聲の屏風と稱すといふにても明けし。實に古狩野の宗たりき。

永祿二年に歿す、年八十有四。

家政

不注意人命を落す

生命の長きを欲すればこそ、苦がき藥を飲み、痛たき療治も受くるものを、己が過にて己が身を殺さんは、口をしきことゝ、此上なきことゝ云ふべし。

記者は小供の病氣のため、暫く赤十字社の病院に入院しけるが、一日看護婦に乞ひて、二階の室を參觀なしけるに、廣き一室はさながら洋酒屋の店の如く、大なる瓶、小なる瓶にて充ちみちたるが、或は流產したる鼠の子の如き胎兒のアルコール漬あり、或は生きたが

ら腐敗して虫の生ぜしと云へる大なる足、或は腸チブスにて死せし人の腦など、汚なくもまたいやらしき物計りを、叮嚀に並べたる中に、三四寸計りなる一本の黑きようじを見出だせり。こは何なりやと問ひけるに、看護婦答へて、こは十九年の間人の腹に入りてありし楊枝なり。名も所も今は忘れけるが、覺ゆるにはわらはの看護せし一老婦なり。その人或る朝齒を磨き舌のこけを取らんとて、仰のきながらようじを以て、舌の上を磨きをりしに、ふと手を離ちしに、此のようじ咽に下り、其後長の間何の事もなかりしが、十九年の後に至りて、胃部に赤く膨れし所出來て醫師の診察を受けしに、正しくようじの先きの顯われ居るをさぐり得たりしかば、遂に赤十字社へ入院して、胸を裂きて之を出だせり。その楊枝こそ即ちこれなりと。楊子は腹中にて全く埋れ木の如き形となれり。

又たその傍に小さき襟止めの蝶あり、これは大給子の姫君の襟止なるが、姫君は毎日學校に通ひ給ひけるに、或る時袴の紐解けゝれば、序でに襟をもつくろはんとして、止めたる針を唇にくはへ給へけるに、如何なるはづみにや、針はすべりて咽に下り、醫師の療治を得て、一週間の後に大便と共に出でたるなりと、尚ほ齋藤修一郎の令孃が、過て飲み給へるおもちやの鈴、或は十二歲の男子が飲める石筆等、種々のものありけるが、之に付きて深く感せしは、人の注意と云ふことなり。災難は不意に起るが如くなるも、決して自然には來らず、禍福門なしたゞ人の招く所なれば、兼て小事に注意して、過を招かざる用心こそ肝要なれ。口に物を含むが如きは誰も爲し易きことなれども、これは小供の時より嚴しく止むる時は長して後迄も習慣となりて止るものなり。たゞに含むの習慣のみならず、婦人が頭のまげに針をさし、或は胸、帶等に針をさして怪我をなすもの少なからず。

或る婦人が針仕事をなしけるに、來客ありければ急きて立ち、持ちたる針を胸にさして出でけるに、玄關の敷居に蹶づきて、針は胸にたちければ、急に醫師の診察を受けしに、針は骨と骨との間に五六片となりて折れさゝりければ、一つを取れば一つ殘り、一つを取れば又後あり、かゝる内胸は膨れ、出血は甚しく爲めに落命せり、幸にして、命を失はざるを得るも、その苦を受くるのみにても、容易のことにあらず。これ全く自が不注意より起ることにしあれば、兼て注意を加ふべきなり。

齒にて物をきり、暗き光にて物を見るなどの事は、多くの人が何の心もなくなす處なれども、堅きものをきりて齒を害し、暗き光によりて眼を害することは如何計り一生の不幸を招くべき、もし人々が萬事に注意を加ふることの密なれば、病院繁盛の半は減じ去らるべし、一家歳出經費の半は減せらるべし、一家不幸不愉快の半は減じ去らるべし、かくて幸福と安慰は一時にその家を訪問すべし。

小兒養育の順序

小さき一動物が始めて世界の一部に生れ出ずるや、手慣れたる看護婦が注意に注意を加へてその動物を洗い拭ひさて衣物を衣せて仕まふや、弱くして恐れたるが如き一聲、振へながらにヲヶアーと叫ばる、これぞ今迄心配したる母の爲めには喜しくもあり、悲しくもあり、おかしくもあり、めづらしくもありて、殆ど心をおどらしむる鶴の一聲にてあるなり。それより温かきフランネルの衣物にくるまれて、以後朝夕離るべからざる縁を持ちし母の腕に倚り、けつとの間より僅かに顏を出だして、細そき呼吸を爲しつゝ世界に出で、其始めて開きし目も、今は閉ぢて安心して眠むれり。死

せるか、生けるか、數時間の間ピクともせずして、母の腕を勞れしむ。その間母は度々心配して、耳を胸の邊におしあて、生命あるや否やを試驗せり。さてかゝるおとなしき間が、最も樂みなりけり。今に程なく休息なき騷ぎ手となりて、母が後悔の涙を流して早く育てよと云ひしは誤なりと訴ふるに至る、然れどもこの時分は已に母の躰も健康に復して、世話しき中に面白き事多きが故に、日々を空々に過ごして、己の老も忘るゝなり、さて其間が最も大切なる時にして、母が空に過ごせる間も、小供は順序を逐ひて生長し、一生を健康にして有益なる人物として過ごすか、不健康にして殼つぶしに終はるの第一階級なり。

哺乳の注意

母の乳にて育つる人は少しは危險も少なけれども、牛の子として育つる人は、殊に注意を要するなり、母の乳は自然に油藥の調合出來てあれば、小供が生母の胎より持參の里みやげなる、胎便とて黑き大便を下すには、母の乳こそ最もよけれども、もし母の乳が暫らく出でざる時は生れて三四時間の後に、粥のおも湯の薄きものを與ふれば、胎便の通じを促がすべし。小供は生れながら已が必要なる事は能く知りたるものにして、空腹になれば、自分より啼きて乳を求め、口を動がして之を告ぐれば、もし三四時にして之を求めざれば五六時間もしくは、六七時間は與へずとも害なし。かくて一日も立つ中には母の乳も少しは出で來りて、生れ立ての小供のためには、充分ならんも、それさへ出でざる時は、一度沸騰したる牛乳に三倍の白湯と少量の砂糖とを加へて一時間もしくは二時間、殊に少しづゝを與ふべし。其間に母は怠らず己れの乳を揉て、一は乳のこりを未發に防ぎ、一は乳の早く出づるを促がす。

不健康の小兒

健康なる小供は両便と空腹を告ぐるの後は、スヤ〱と眠りて決して啼かざるものなれば、生れ立てよりイツの悪しきは、何れか悪しき處ありと知りて、醫士の診察を受くべし。老人のある家にては、殊に孫を可愛ゆかるの餘り、頭の先より足の先迄を餘り温く過ぎしむるとなれども、小兒の頭は元來温きものにして、家の内に居りて風に當らざる時は決して餘計の被り物は不用なり。

一人の小兒は十人の來客と云へば、世話しくなるは兼ての覺悟なれども、目に見へて世話しくなるは、乳を飲しむることと洗濯なり。赤子は躰の白き皮の取れるが故に、日々下衣を洗濯せざれば不潔なり。元より子供の躰の洗濯は云ふまでもなし。

小供の病氣

小供の病氣は通常五種を以て最も多しとす。五種とは第一胃の病、第二大便、第三熱、第四腫物、第五腹の病なり、子供百病の元は殆ど胃にありと云ふも過言にあらず。胃の悪しきより、通じも變し、腹も傷たみ、頭も悪しくなる。其胃を害するは、乳の過飲より起るを多しとす。されば子供の啼くは氣の毒に似たれども、小供は啼くべく作られたる動物なれば、啼く事は左程恐ろしくもなければ、少しのとに恐れて乳を無やみに與て、胃病を起さしめざると肝要なれ。

胃病を始め凡て小供の病氣は、少しの事より大事に至れば、少しの時に醫士に見することそよけれども、少しの胃病の時は白湯の砂糖を加へしものには灌腸して流しを取るを宜しとす。熱を發する病、或は出來腫等は、種類多ければ一口には言ひ難けれ共、出來物は度々糠汁にて洗ひ、亞鉛花香をつくれば大凡は醫すべく、熱は齒より生せし熱か、腹より起りし熱かを見分て、齒の熱なれば齒の根を切るとか、腹に異變あらば醫師

の診察を受くべし。

牛乳にて育つる人の忘るべからざるとは、乳を飲む器械を清潔にして、一日一度位は必ずソーダ水にて洗ふとと牛乳を餘り濃きに過ぎざらしむる事なり。かくして時間を定めて乳を與へ、過飲せしめざれば、大凡の病は後に退くとも、進んで襲わざるものなり。

細君の心がけ

やぎ生

災も三年經れば要となるてふ諺あり。不用のものといへども、三年仕舞をきなば、其間には要するときの、あるべき事を謂たるなり。此諺の如く、いかに邪魔物なりとも、そを丹精して取揃へ保存し置くときは、三年は扨をゐて、半年もたゝぬ中に必要生じ、今迄邪魔物と爲したるものを、尋ぬることあるべければ、細君はよく此邊に心がけ、夫の不用物も、己の不用物も、いらぬ〳〵といひて、放棄すべからず。

拔糸、布切など丸めて掃出し玉ふな、或人は如此糸を纏めて仕舞をき、夜の長き日又は用事の暇に取出して、一本づゝつなぎ、一年ばかりの中に、立派なる帶二つ迄造りたり、又裁殘りの小切は、はぎ縫して襦袢、胴衣を調製せしが、其色どりの配置方なんど、なかなか工みに出來居れり。かゝることを爲すは、繪入小新聞三頁の、醜猥なる雜報を讀むで、貴き時を費すに勝るべければ、是非實行せられよ。自ら着用するを好み玉はずば、家の婢僕に與ふる乎、さらずば、貧しき同胞に惠むべし。彼等はいかによろこぶ事ならむ。

精細に見積りても殘餘の生ずるは、日々の食物なり。寒き中は兩三日間保つべけれど、追々暖氣に向ひなば朝に炊烹したるもの、夕には酸氣を來すべし。そをよく注意して、空氣の流通よきところに置き、腐敗を

防くべし。又餘りたる食物が、假令些少なりといへども、妄りに棄つべからず。吾人のかく生活しゆくは、此食料ある御蔭なり、而して其食料が、吾々の口に上る迄には、實に數十回の勞力を要せしことなれば、一度ひ考へをこゝに及ぼすときは、食毎に拜禮すべきこそ當然にて、一粒の飯といへども、棄つるなどは以の外のことなり、故に家禽二三羽養ひをきなば、餘りたる飯粒などの處分には苦しまずして、常に卵を得らるゝなり。これ一擧兩得にあらずや。家禽の世話は細君に適當なる業にして、慰みも亦深かるべし。

婦女職業案内

石版畫彩色

繪双紙屋の前又は勸工場内を歩し、殊に人目を惹くものは石版畫なり、近來此術大に精巧の域に達し、古今名家の書畫を模寫し、一見眞物肉筆と異ならず、又東京各所又は日本の勝地名景を寫出して大に趣あるものあり、若し降つて大黑の圖の如き惠比須の圖の如き、美人の如き、兒童嬉戲の圖の如き等、五六年前までは一葉五六錢なりしが今や漸く下落して一枚七八厘の正札附にて露店の飾物となりぬ、然れども此業の前途益々多望にして、益々原版の新奇なるものを出し、之に種々の彩色を施さんが爲に、各工場にては大に内職人を募集す、東京市内此處彼處の辻々に張紙して職工を呼ぶ文に小兒でも、女でも出來る内職一日十錢より上は七八十錢迄とあり、其所は淺草に於てし或は芝に、或は麻布に、或は本所に神田に四谷に、至る所此廣告を見ざる事なし。

然らば石版畫彩色は女にでも小兒でも誰にでも出來得る職業なり、然れども一日十錢の賃銀は容易に信ずべけれども、一日七八十錢に至りては、未だ悉く信す

べからざるものあり、或る確實なる工場に問合せたるに、此職業に就くものは始め三五日間は筆の運用法又は繪具の溶かしやうを覺ゆるため其間は無賃銀なり、大抵一通り心得たる上は、百枚七錢の割を以て賃銀を定む、而して最初は中々百枚は覺束なく二三十枚を一日の職とすれども、其人の器用不器用により、半月若しくは一ヶ月中には百枚の彩色する事容易となるべし、五六年以前石版畫の珍らしく高價なる時は、彩色業の賃銀も一枚三四厘より七八厘なりしも、以上述べたるが如き次第となりたれば、目下の處にては百枚僅に七錢の賃銀に下落するに至れり、且つ大低各工場にては石版畫を塗り損せぬやう、若し職工にて一枚を塗り損せば、其石版畫一枚丈の價を辨償せざるべからず、故に一日五十枚を彩色して三錢五厘（百枚七錢の割）を得る職工が、原價四厘の石版畫五六枚を塗り損ぜば、得る所の賃銀は誠に些々たるのみ、職工たるもの宜しく小心にして精密ならざるべからず、小心と精密とは婦人の天性に屬するものなれば、職業に志ある婦人は宜しく此業に從事するも可なり、目下の處にては高き手間賃の仕事なきも、右の彩色をしても其人の熟練により一日十錢以上の賃銀を得る由なれば、貧にして饑渇に苦み居る人も、富にして無事に苦み居る人も、共に爲し試むべき職業なり、作業は其工場に日々通勤せずとも自宅にても出來得るものなれば、男女に限らず、少しの暇あらば宜しく爲し試むべし、些少の賃銀なれど、己が額上の汗より得たる貴重なるものなり、毎度言ふ事ながら、暇あるは罪と貧の本、働くは富と德の本と知るべし。

手藝案内

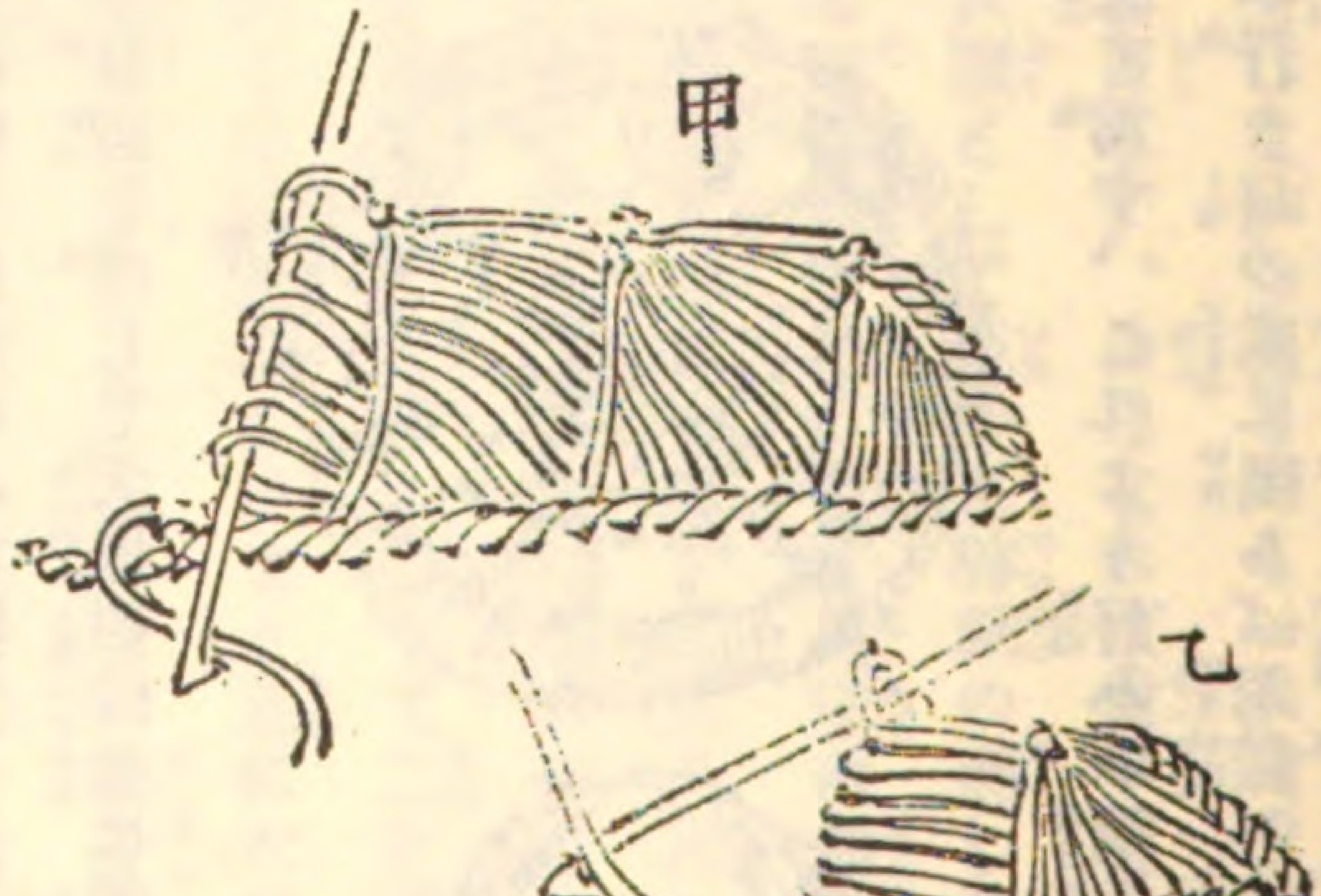
麻葉崩しの肩掛

近年肩掛の流行は重に「子ル」の淡色か駱駝の毛織を用

ゆれども、此は妙齢以上の婦人が肩に纏ふ美品なり、萌え出づる若葉の五つ六つの女の童より十二三位の女兒が毛絲製の肩掛を、其が肩邊に垂れらるゝ樣の如何に可憐にして、而して美麗なるよ、今茲に肩掛の一種麻葉崩しの一法を案内すべし。

蓋し手製の毛絲肩掛は「フーク」と「ピン」の外、他に一物の機械を要せざるが故に、其製作品は勢ひ彼の舶來機械編に其美を讓らざるべからず、機械編は製作精美なりと雖も、單に衣服の上の裝飾品たるに止まる、手製は其作較々粗にして多くの毛絲を要すと雖も、肩掛の主要たる冬日風雪の朝夕尙幾領の暖かを執るに餘あり、然れども手製も出來上りし製作品の美麗にして編法に凸凹なきを要するは論を俟たず、殊に肩掛の如きは外部に飾られて肩下人體の半を蔽ふものなれば、躰裁の宜しきを好むは尙更に論を俟たず。

麻葉崩しの編法とて別にむづかしきものにあらず、先づ第一番に一重連鎖を自分の思ふ長さ（譬へば巾三尺の肩掛を製せんとならば三尺、四尺なれば四尺、其形は方形若くは長方形、其人々の好みに任せて宜しきも三角形にして角の一方の尖が躰の後部に垂るを毛絲製に適當なりとす）に拵へ置き、是を土臺として編み始むるなり、而して其編法は插圖(甲)に依りて示さるゝ如く、最初の輪に

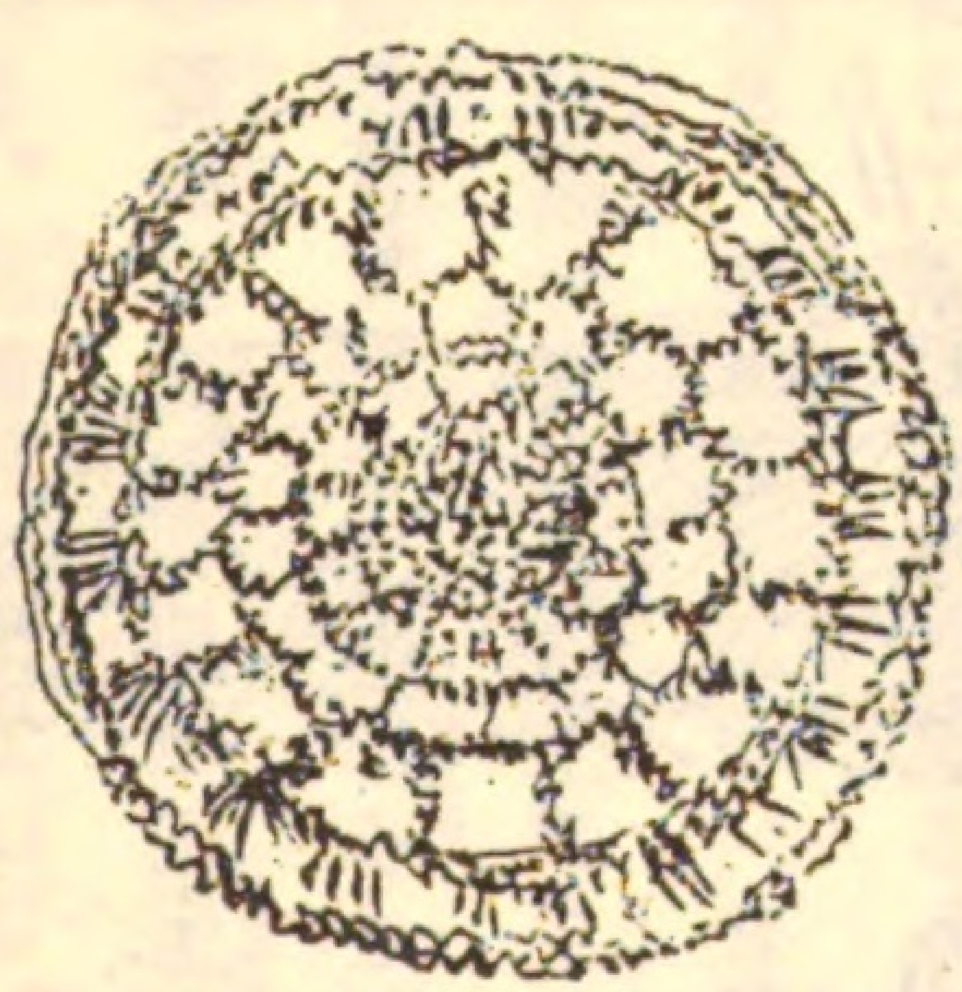


「フーク」を通して絲をすくひ「フーク」に懸け、而して又第二と第三の輪と共にすくひとり尙次ぎに其基本となりたる連鎖の輪に通し以前の如くし、又其基本の次

の輪に通し都合五個の輪を「フーク」に持たしむるやう絲を掬ひ、此の五個の輪へ一度に絲を通すなり、斯樣にして編み行く時は輪一個を生ずべし、此輪より又絲を掬ひて引きしむる事乙圖の如くす、幾度となく斯の如くする時は見事に麻葉崩しの肩掛を得るなり、くれ〴〵も地は平坦にしてでこぼこにならぬ樣注意すべし、且つ編仕舞の絲を加減して能く締め置くを肝要なりとす、但し幼き女兒のものには段每に毛絲の色を替え能く合せて編むがよし、然する時は誠に奇にして華麗なる製作品を得るなり、十二歳以上には海老色か煤色か、兎に角くすんだる色を用ゆれば派手に過ぎずしてよろしきものなり。

毛絲製の手提籠

毛絲の手提籠も隨分可憐なるものなり、閑暇ある人は之を製し試むるも亦無用の業にあらざるべし、則ち之を編む毛絲の色は其人々の嗜好に任せて宜しきも成るべく華美ならざるものを用ゆるを専一とすれば濃茶とか、煤色とか若くは黑とかを用ゐて可及的派手なる色を避くべし、此編法は嘗て本紙上に記載せし毛絲の巾着の如く底の中心を製すること甲圖の如くし、これより目數を增して大抵四段位に編み擴げ、以て手提籠の



甲



乙　手提籠

底と爲す、これより好みの編方に任せて乙圖の形に編み行き口の處に至らば銅線を毛絲の心に容れて毛絲の軟弱を保護すべし、然らざれば毛絲は柔かなるものなればグダ〳〵して洵に體裁の惡しきものなれば此處に至らば製作者は必らず心して編むべし、且つ釣手は四

子か五子の毛絲を綯り合せて宜しきも矢張り銅鍱を中に包みて鞏固にする方又一入の便ならん、且又言ふべき事あり、全躰此の手提籠はいろ〳〵の水菓子類を盛るものゆゑ其の水菓子に應して毛絲の色を用ゆべきなり。

ね ん ね こ

一躰「ねんねこ」は餘り上品なる衣類にあらず、而も平民的中の最も平民的なるものなり、男之を彀りて長火鉢の邊に坐せば、脊上に文身ある人に近く、婦之を着けて井戸側に赴けば、髪を達摩返しにでも結ばねばならぬ風俗ありて決して品の善なるものにあらず、然れども「ねんねこ」の用は他に「ねんねこ」として、寒威凜列咋今の如き時候には、其便亦尠しとせず、亦一つや二つの嬰兒は内にばかり蟄居するをむづかりて、外に出んと欲する時には、兒守や乳母や母親の脊上には、是非とも嬰兒を唆むる「ねんねこ」なかるべからず、殊に見守、下婢、乳母等のなき家にては、主婦は兒守片手に家政を執らねばならぬゆゑ、「ねんねこ」の便利を假らざれば、一寸臺所の仕事をする事も出來ぬなり、併しながら男も婦も一人身の時には成るべく着用せぬを可とす、何となれば前申す通り「ねんねこ」は士女の衣服として至つて躰裁の惡しきものなればなり。

却説躰裁の惡くとも兒守の便利なるには易へられず、今其製作を記せば、二丈八尺の端物をもて、袖各一尺五寸、丈を二尺五六寸にせんとすれば、兩袖各三尺宛を則ち六尺を裁ち去りて之を兩方の袖とし、普通の物にては殘餘のものより更に六尺を取りて襟に充て、其殘餘を「身ごろ」として、幾分か裏に折返さる。人々の嗜好により「おくみ」若しくは脇入を入れるなれば又夫丈の布帛を要するが故に、二丈八尺物を以て製せんとせば、殘餘を裏に折返さず、裏地を一ぱいにせねばならず、左なくては二尺五寸のものを得ること困難なり。

而して裏地は普通のもの(奥身若くは脇入のなき方)にては一丈もあれば澤山なり、袖口には各三尺宛の南京繻子を用ゐて可なり、又人の好みにより襟に天鵞絨を掛くるもあれども掛けぬも妨げなし、「ねんねこ」は兒を負ふを以て專用とすれば、成るべく「えりかた」の廣きを便利と爲す。

「ねんねこ」に製する布帛は、上等なれば隨分高價に上り、糸織も用ゐらるべく、八丈も用ゐらるべし、併しながら元來平民的にして實用を主とするものなれば、手丈夫なる双子が一番よろし、縞柄は瀧縞か、矢筈縞か、兎に角目の荒きを用ゆるもの多し、裏地は更紗形の金巾かキヤラコ、袖口は南京繻子か近來流行の織姫繻子なり、織姫繻子は流行する程の價値あり、南京に比し光輝もよく保持も長し、而して此見積にて一枚の「ねんねこ」を製する價は、双子一端六十錢より七八十錢迄、更紗金巾一尺一錢六七厘、同「キヤラコ」なれば一尺二錢四五厘、模樣は人々の好々に任せて可なり、綿は一袋七八錢の青梅二袋と之に南京繻子か織姫繻子かの袖口代を合計すれば一圓内外より一圓二三十錢にて出來得らるゝなり。

社交一斑

流行の栞

春夢

目下の流行衣

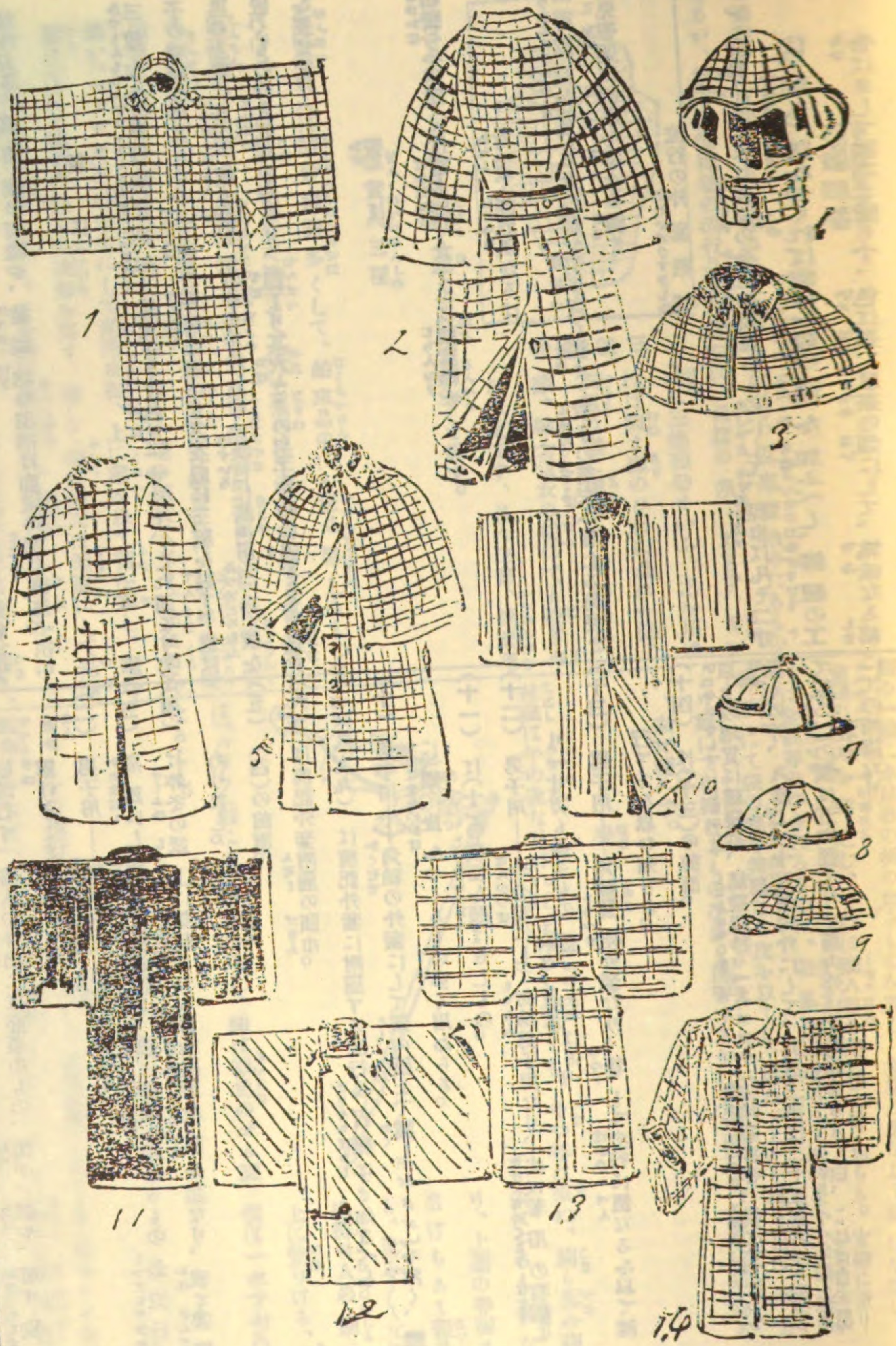
徒然なるまゝに元日より此方の流行衣服の最なるものを記せば、

衣服は

糸織、市樂の三枚重、これ男子に最なるもの。黑の紋附の上着に白羽二重を下着にしたる婦は高貴の流行。利久鼠又は藍鼠のふき模樣か裾模樣の三枚重を着したるものは意氣なる女子の好尚。矢絣のお召縮緬や、珍柄の山繭織、奇縞の八丈を曳くものは商家の娘子。

羽織は

男子には七子、市樂、羽二重、色は凡て黑。婦人には禮服になし、但し


1
2
3
4
5
7
8
9
10
11
12
13
14

令閨令嬢の家居着に黒縮緬を見、商家の娘の羽子遊に糸織の大縞を見る。縞市樂の羽織や、結城紬の羽織は商家の男に見る。

紋は

三紋七分五紋三分の勢、其大きさは曲尺一寸以上、これ固より男子の羽織に用ゐらる。一種の社會の婦にも其衣服に三紋を點す、或は黒の上着に五所紋を置くものすらこれあり、淡色に淡色の三所紋を置くものは大抵見る所なり、固より其大きさの男子の中に過ぎさるは言を要せず。

帶は

相變らず男子には博多織、女子には繻珍織。

可憐で無邪氣なるは

幽禪縮緬を着たる女の童が羽子突く樣と、双子の筒衣を着たる男兒と兵兒帶連が紙凧を揚ぐる樣と。

流行の外套數種

(一) 女物——これは從來の合羽形同樣のものにして、襟巾は凡そ二寸位、襴の襟をつくれば尚ほ一段の暖を加ふべし、飾紐の工合はさして被布と變らず、色は茶、鼠茶の類にして、地味なる縞柄流行す、婦人の外出には必須のもの、雨や、雪や、翳す袂の露けきことはあらじ。

(二) 男子用——從來の形、多言を用ゐず。

(三) 肩廻にして「ケツプ」といふ、襟に獺皮を用ゐるもの最流行。

(四) は昨冬の紙上に掲載したる白木屋形臂附外套なり、彼と參照ありたし。

(五) (四)の前面。

(六) は前記外套附屬の頭巾。

(七)(八)(九) は前記外套に附屬する流行鳥打帽子と知るべし。

(十) 男子用——角袖の外套にして腰の邊まで隱し「ボタン」を附く、襟に獺皮をつくるもの多く用ゐらる。

(十一) は(十)の後面を顯はせしもの。

(十二) 男子用——半合羽にして勿論男子用なり、丈は着用の羽織より一寸方も長きもの盛に行はる。

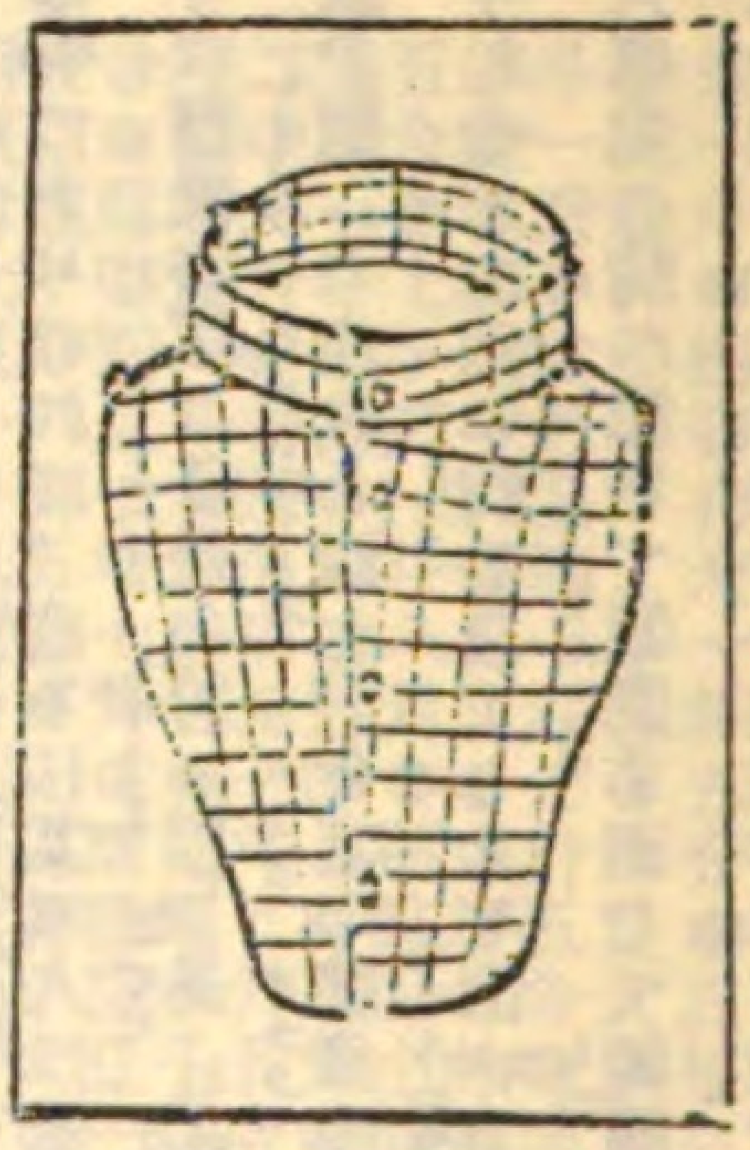
(十三) 男子用——角袖臂附外套なり、着して歩行に便なるを以て流行するを思ひ知らる。

(十四) は(十三)の前面。

以上の地質は縞羅紗、縞綾羅紗、「スコッチ」無地羅紗等、價は(十二)を除くの外、八圓より十五圓内外にして、其最上等は二十五圓内外、而して(十二)の價は五六圓より十圓内外にて調製せらるゝ由、これは白木屋にての相場なり。

三徳襟巻

三徳襟巻さは圖によりて示さるゝ如きものなり、近來賣始めたるものなるが、都下三徳襟巻の流行品さなるやは、保證の限にあらず、何が故に三徳襟巻さいふ、之を用ゆれば胸さ襟のひねぬ是れ一徳、衣服の襟に垢のつかぬ是れ二徳、紳士貴女の前にても脱ぎ取るに及ばず、是れ三徳、効能書は以上の如くなれば、暫く記して後の參考さ爲す。



三徳襟巻

銀貨入三種

全体銀貨入は隨分種類多くして、舶來品中にも佳品夥しきものなれば、人々の好みによりて携帶す、故に取別けて流行品さする事甚だ困難なり、然れども近來鐵道馬車や、横濱行の滊車中にて、乘客の金錢を出入するを見るに、其大中の金匣たる銀貨入は、昨年の春頃舶來せし形を、種々に日本にて摸造したる一種の銀貨入なり、元は口を銀か「ニッケル」の竹矢來にして開閉自在、上に鐶を以て蓋を爲し、鐶を開けば口も開かれ忽ち矢來形を爲す、而して袋は舶來は柔軟にして光澤ある羅西亞皮を用ゆれども、日本製は熟皮又は美麗なる布帛を用ゆ、價は日本製にて四五十錢。今一種の流行品は熟皮製(セーム皮)に限り、袋の一端に水注器の柄の如きものを附し、金屬の環を以て袋口を扼し、金錢の出入を司しむ、これは商人等の用品さ思ひ知らる。女物に至りては金具等のつきたるものは、殺風景の嫌ありて流行せず、矢張延命袋形にて袋の表を美麗なる皮を以てし、裏をゴムにて張り口は兩方より紐にて引締むるものを多く携帶するやに見受けたり、價は幾干なるか、未だ稽へず。

春駒

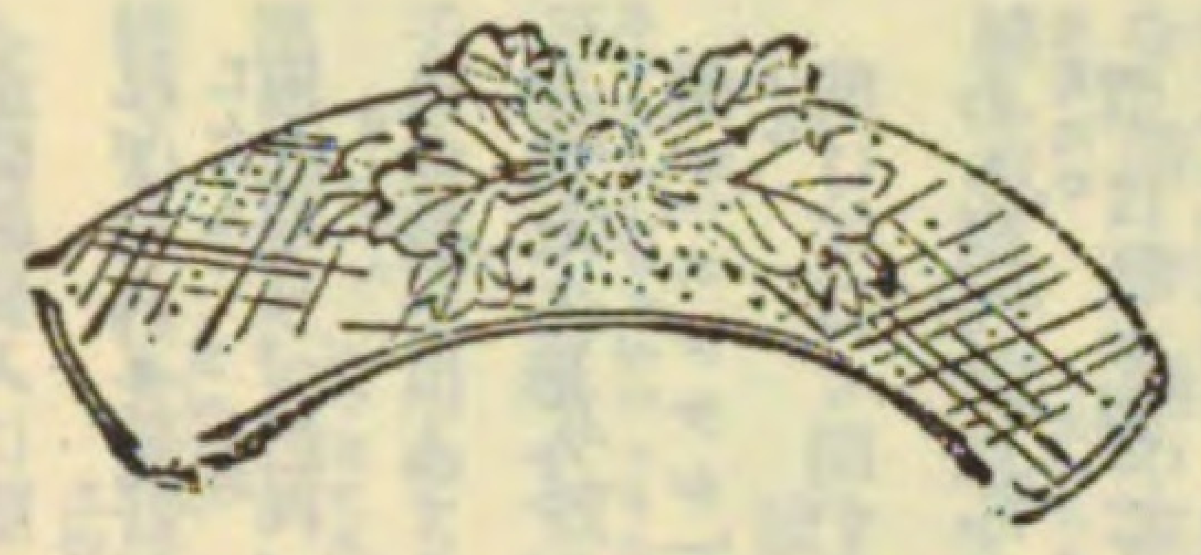


茲歳は午の歳なりければ、何事も馬づくし、今や春は來ぬ、駒も勇み駒のはやるも理なり、上圖の春駒さ名けらるゝ髮具も、勇み〳〵て遂に都の人の頭の上に登りける、脚は「パラフ」製にて鞭の形を爲し、駒は彩色のゴム製、價は一本十七八錢なるよし。

金モール刺繍(根掛)

金モールの流行も甚しさいふべし、近來髮具に至るまで金モールを以て製作す、たさへば方五六寸の縮緬(色はさま〴〵)に見事に銀盞金モー

ルを施したるもの、これは丸髷、唐人髷、銀杏返しに用ひらる（但六十錢内外銅臺は四十錢）、



島田用

圖に示せるは島田用にして臺を綸子張にして、古代菊模様の金モールを附せしものなり、價は十八錢にて購ひ得られ、割合に廉價なるものなれば賣口甚だ宜しき由、但し賣捌所は尾張町松田白牡丹也。

遊具の一種

近頃軍人社會に將校將棋なるもの頻に流行する由、載せて『兵事』にありければ、直ちに某軍人に就き其詳細を聞きしに、果して實なり、將校將棋は普通の將棋と異り駒の數も多く且つ場面も廣きゆゑ、随て興味も深し、今其の勝負の方法を記せば、該將棋は同形に作りし七十二個の駒を以てし之を敵味方の二方に分ち雙方互に一師團三十六個宛の駒を率ひて戰闘す而して師團中には一師團、二旅團、四聯隊、九大隊、十二中隊、一砲隊、三突騎、三地雷火、一鹿砦の駒ありて之をなすには三人を要す乃ち二人は敵味方と分れ一人は審判官となるの方法にて彼我共に三十六個の駒を得て之を盤面上相當の地點に排列し先手後手を定め彼一歩我一歩相進みて衝突す然るに審判官は二軍の衝突する毎に駒の裏を見て勝たるものを殘し敗たるものを除く尚師團、旅團、聯隊等は其駒の裏面に記載しありて彼我を區別するには紅白を以てす去れば彼我共に唯だ其軍を知るのみにて獨り兩軍を見得るは審判官のみなりき、又駒の進退は黒點ありて其黒點より黒點までなれども突騎は道路さへ通すれば一足突に敵の本營を衝く事を得べきも地雷火鹿砦は毫も之を動かす事能はず、又大隊は中隊に勝ち聯隊は大隊に勝ち、旅團は聯隊に勝ち、師團は旅團に勝つ然れども砲隊なるものありて是は如何なる駒に衝突するも雙方互に打死す故に若し我砲隊をして敵の師團或は旅團に衝突せば其戰功や實に大なり、地雷火は一度設置すれば之を動かす能はざれば地雷火は敵軍の來襲すべき要路に伏せて敵の師團若くは旅團を鏖碎し得べし、然れども時として敵の中隊に遭遇して發する事あり甚しきは味方の進退を妨げ苟くも本陣を衝かるゝことありて地雷火は如何なる大軍の來り衝突するも審判官の爲めに兩つながら取去らるゝものなれば之を捜索するに突騎を用ゆ突騎は道ある所を自在に進退する特權の外、中隊と均しき實權あれば敵の突騎を殺すに大功あり、鹿砦も亦た動かす能はず若し鹿砦の後に聯隊ありて之を守らば聯隊以下の攻軍は敗者となる去れど旅團を以て襲へば聯隊鹿砦二つながら審判官の爲に取り去らる最も砲隊なれば如何なるものと鹿砦を守るも鹿砦丈けは破り得るも砲隊も無論討死す其の正面なるのみならず左右よりするも亦た同じ勝敗の決するは敵の本營に突入する遲速にありと雖ども敵の直に之を打破し得るに於ては其効なきものとす敵の遂に如何ともすべからざ

ろに至り勝敗忽ち決すべし是れ其方法なりとす

日用品物價　二月五日

◎白米（一圓につき）●一等白米九升五合●二等白米九升七合●三等白米一斗●四等白米一斗五合●五等白米一斗一升

◎雜穀（一圓につき）●本貫大麥三斗一升●脇塲大麥三斗二升●裸麥二斗一升●佐野割麥一斗七升五合●同次割麥一斗九升●同下割麥二斗●上等竹林麥一斗六升五合●中等竹林麥一斗七升五合●下等竹林麥一斗九升五合●上小麥一斗八升●同脇塲小麥二斗●佐野搗粟一斗五升五合●下總鴇粟一斗七升●向地蕎麥二斗三升●山莞蕎麥二斗●莞粟二斗八升●亮黍二斗六升●常陸黒胡麻一斗五升五合●山稗五斗二升●常陸稗五斗五升●室関黒豆一斗六升五合●同鶴の子豆一斗五升五合●本塲豌豆一斗六升五合●脇塲豌豆一斗七升●栗橋空豆一斗六升五合●下總空豆一斗七升●讃岐空豆一斗八升五合●庄内黒平大豆一斗七升●本穀大豆一斗八升五合●南京青大豆一斗九升●南京大豆一斗八升八合●栗橋青大豆一斗七升●脇塲青大豆一斗七升八合●五社大豆一斗八升●青柳大豆一斗七升●竝大豆一斗八升●上海大豆二斗五合●室関小豆一斗二升八合●南京小豆一斗四升●秩父大納言一斗●向地大納言一斗一升●南京白小豆一斗三升六合●粕壁色瀬小豆一斗三升五合●中手小豆一斗四升●竝小豆一斗四升二合●吟小豆一斗三升五合●目黒白サ一斗八合●目無白サ一斗●向地金時一斗四升五合●達磨金時一斗二升五合●室関隱元八升八合●銚子隱元九升●更紗隱元一斗四升●鶉隱元豆一斗五升

◎薪（一圓につき）●上總木更津出堅五分一三十八束●雜五分一五十三束●同堅本三十五束●堅三五〆三十束●黒木束五十束●同松三五〆五十束●同無才六十五束●松五六貫五十五束●同大堀出堅木五分一三十三束●同雜五分一四十八束●同堅五六〆二十八束●同姉ヶ崎出松大八八十五束●同無才百十束●同姉ヶ崎堅大八四十五束●下總久角出●西川三尺三寸廻り十二束●同西川三尺廻り十三束●同二尺八寸廻り十七束●雜西川三尺三寸廻り十八束●同西川三尺廻り二十束●同西川二尺八寸廻り廿四束●松尺才二十五本●同九寸才三十五本●同八寸才四十五本●同七寸才五十五本●同六寸才七十六本●同五寸五分才九十本●同五寸才百十本●同四寸五分才百二十五本●同四寸才百四十本●同三寸五分才二百三十本●同三寸才二百八十本

◎醬油（一圓につき）●最上七分二厘より七分八厘●極上八分三厘より九分三厘●上物九分八厘より一樽二分〇中一樽四分より一樽五分迄●竝品切

◎油（一樽につき）●地水九圓四十錢●上三銘十圓二十錢●荏油十四圓五十錢●綿白六圓六十錢●桐油八圓四十錢●胡麻油十圓二十錢

◎炭（一圓につき）●紀州物●紀州丸備二俵●同中二俵二分●同竝二俵三分●同角備最上二俵四分●同中二俵五分●同竝二俵七分●同淺備上三俵三分●同丸淺備三俵六分●野州出土釜（百俵に付）●網丸通上二十八圓五十錢●同竝二十七圓五十錢●燈最上二十二圓●同竝二十圓●同割物十九圓半●同雜丸通飛二十一圓●同竝二十圓●同次利物十九圓●伊豆天城出（一圓に付）●千城最上五俵●同竝五俵二三分●同次五俵●同東油物七俵九分●同小焚飛四俵●同網上飛四俵五分●同次五俵

◎石油（一箱につき）●上ホーキ一圓七十五錢より一圓七十六錢●扇タンク一圓七十二錢より一圓七十三錢●旗印一圓七十二錢より一圓七十三錢●上錨ロシャ一圓八十二錢より一圓八十三錢●二番同品切●上チャスタ一圓八十四錢より一圓八十五錢

雜録

遺珠類々

○母の價　　西班牙古諺

母の一オンスは僧の一封度に値る

○事業　　カーライル

事業を見出せる者は幸福なるかな、彼をして他に幸福を求めしむる勿れ

○運命　　マホメット

徒らに爾の運命を追ひまはる勿れ、爾の運命は常に爾の後に從へばなり

○經濟の秘法　　ベーコン

一片（ペンニー）の利を儲けんより寧ろ一片（ペンニー）を節倹するを務めよ

小供と教師

無一生

此話說は無益の異見立てをする馬鹿氣た人物を御覽に入れます

一人の小學校の生徒が隅田川の土堤で巫山戯て居りましたが足を蹈滑らして轉々と川へ陷りましたが僥倖と川面に差掛ッて居る楊柳の枝に取付イて居ました折柄此處へ通掛りましたのは小學校の先生でムイました夫れと見るより小供は「先生大變です早く助けて下さい」と大聲を發げて救助を要めました教師は此叫喚を聞附けて後邊振回り儼然として異見を始めました「ア、コノ惡戯ッ小僧が御覽な詰らない眞似をすると揚句の果には得て此樣ナ次第になるんだホントニ油斷も透も出來やアしないへ此樣な腕白小僧には何程位イ世話が燒けるか知れやアしない此樣な餓鬼を有ッた兩親達ニッ不運だ眞個に兩親達の身になッたら如何ナだらう實に氣の毒ナものだわい」

多辨家や學校の監督者や博識顏する人達は皆コノお仲間でムイます造物主が最負分に此樣ナ人物を澤山におこしらへになりましたが此樣な人達は唯々口先で喋るとをのみ專一と心得て居ます

先生お講釋は後廻しにして私を土堤の上に引上げて下さい賴みますよ

死と樵夫

一人の哀れな樵夫がありましたが今山から歸路と見へ寄る年波と共に薪束の重量に壓れて悲し相に呻吟りながら腰は梓の弓をなしトボ〱と足の運びも覺束なく燻果てた吾小屋へ辿付ンと焦慮ッて居りましたが最早足は言ふとを聽かず五躰は利かない樣になりましたので其處へ撻平と薪を下ろして吾が薄命を嘆ち始めましたが偖も此爺樣が現世に生れ落ちてより以來如何ナ樂しいとがありましたらう歟折に觸れては一椀の粥も啜れないとがムイましたが休息と云ふものは皆無形なしでムイましたヤレ女房だヤレ小見だヤレ徴兵だヤレ

年貢だ扨は無報酬の勞働やらにて不幸の壽園は完く成就ました斯る有樣で現世が厭になりましたから樵夫は死を呼びましたので死は取敢ず遣ッて參り要事の次第を尋ねました其時樵夫の申しますには「汝さんをお呼立て申したのは外でもありませんが何卒早く手傳ッて此薪を背負はして下さい」と
人一度死すれば萬事休みます併し假令如何樣に苦患をしても死ぬるとはありません死んでは花實は咲きません此れは不斷吾人が口癖の樣に申すとでムイます

牡　鷄　と　眞　珠

「一羽の牡鷄が餌を拾ッて居りましたが一顆の眞珠をホヂクリ當てましたが牡鷄は此を寶石細工人の許へ持ッて參りまして「寶石細工人さん御覽なさいな如何にも眞珠は美事ナ物品には相違ありませんが此品よりか一粒の穀物の方が餘ッ程私の役に立ちますよ」
一人の文盲が珍らしき眞筆の書物を讓受けましたが先生右の品を持ッて隣家の書籍商の許へ遣ッて參りまして「書籍商さん御覽なさいな私は此品は結搆な物品には相違ないと思ひますが此品よりか天保一枚の方が餘ッ程私の役に立ちますよ」

黃　蜂　と　蜜　蜂

細工の手際で細工人が識別ます
某處に主の分らない蜂蜜の巢がありましたが黃蜂共は自分達の所有だと言張り蜜蜂共は左樣甘くは問屋で卸ろさぬと言ッて承知致しませんので茲に一塲の紛議が持上り果ては某細腰蜂の廳に告訴して黑白を分けるとなりましたが容易に裁判が落着きません數人の證人が現はれて蜂蜜の巢の周圍に羽翼が生へて居て蚊々言ふ少し長めで其色合は餘程帶黃だ鳶色で宛然蜜蜂の樣な動物が見へたと申立てましたが黃蜂の方にも蜜蜂と同樣に數人の證人が現はれましたので判事役の細腰蜂は何方へ團扇を上げて宜イか判断が着きませんので又々吟味に取掛りましたが傍でガヤ〲騷ぐ斗りで頓斗肝腎な要點が判然致しませんので一疋の蜜蜂はモドカシがりまして「何ンだ彼樣ナ眞似して埒もない指折り數へて見れば裁判所へ持出してから最早六ケ月にもなる

が裁判が落着とは偖置き最初も現時も同じとだ此樣愚圖〳〵して居る内に蜜は腐敗ッて仕舞ハア眞個に冗談じやないや彼樣ナに論諍たり豫審調したり屁理屈を言ッたりして何が何だか薩張エタイが分りやしないや夫れよりか細工は流々仕上げを見ろだ此處は一番黄蜂共が工作に取掛るんだね此れが何より上分別と云ふものだ左樣すりや誰に彼樣ナ甘い蜜汁で彼樣ナ美事ナ巢が出來るか分るだらうよ」處が黄蜂共は蜜蜂の發言に應じませんので玆に始めて此細工は到底黄蜂共の手際に及ばないとが讀れました其處で判事細腰蜂は蜜蜂の方に團扇を上げましたので長々の裁判も漸ッと落着致しました去れば人類の裁判を致します上に付イても斯くありたきものであります手輕るい社會の裁判は法典の代用を致しますもので正式の裁判の樣に金錢を損したり資産を傾けたり貴重な時間を潰す憂慮はありません

時事一斑

總　撰　擧

總撰擧の期は決せり三月第一日と。三月第一日は以て藩閥政府の命運を卜するに足らんとするなり。國民たるもの豈心せずして可ならんや。

一　打

『官紀振粛』の語叫ばれで世議喧すしかりし農商務省も、遂に一打落ちて、後藤大臣兇せられ、榎本武楊子代れり。

貧　兒

今、我邦に貧困にして就學し能はざる兒女百五十八萬四千七十九人ありといふ。内男兒四十九萬七千百六人、女兒百八萬六千九百七十三人、女兒は男兒の倍數に餘れり。貧兒教育問題も亦大問題なる哉。

春　光

寒颪歇んと欲して還た料峭、自ら春光の天より落るあり。一點の芳信梅枝におとづるゝも亦應に遠からざるべき乎。

天のとをあくるけしきもしづかにて
雲井よりこそ春はたちけれ。

ア、神は今我等に長閑けき日を贈らんとす。

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵税 地方共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰）一回ニ付金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人 垣田純朗
編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿五年九月十四日遞信省認可